

阿智村伍和大鹿地籍県営土地改良総合整備事業に伴う  
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

# カヤハラ遺跡

1995.3

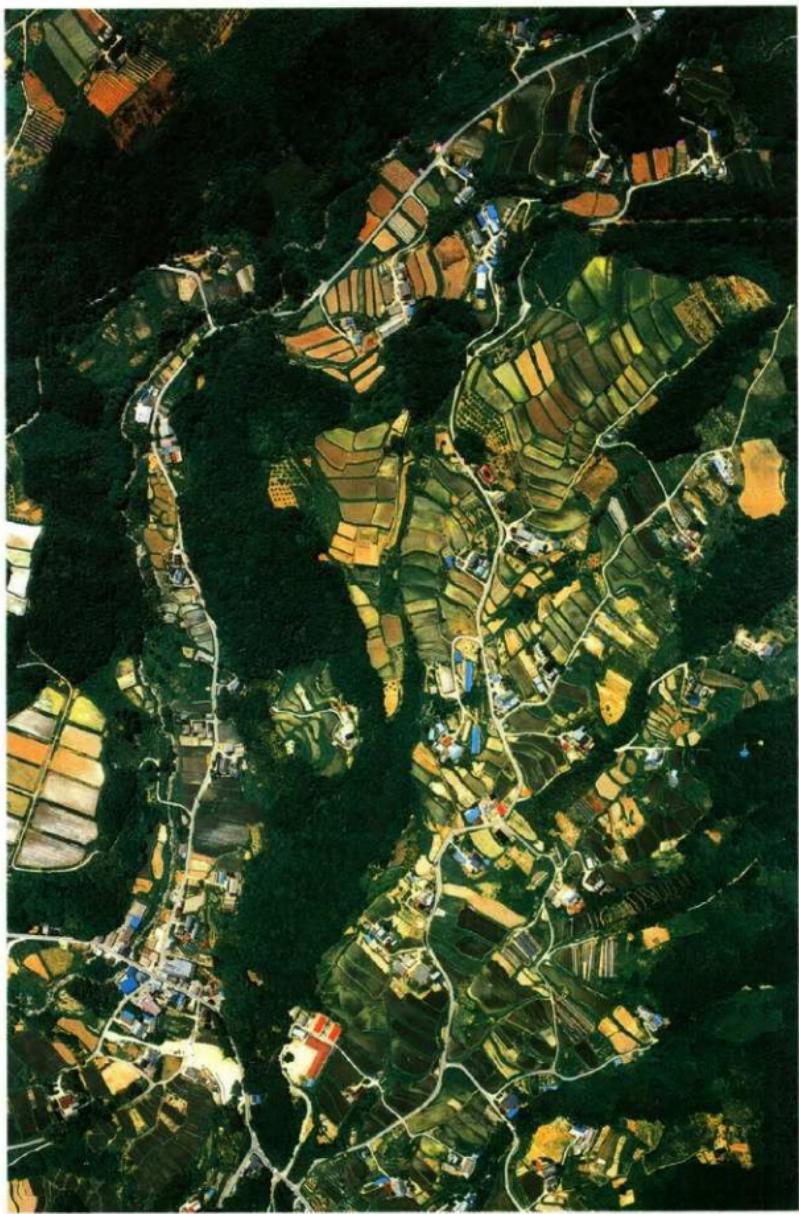
長野県下伊那地方事務所土地改良課  
長野県下伊那郡阿智村教育委員会

阿智村伍和大鹿地籍県営土地改良総合整備事業に伴う  
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

# カヤハラ遺跡

1995.3

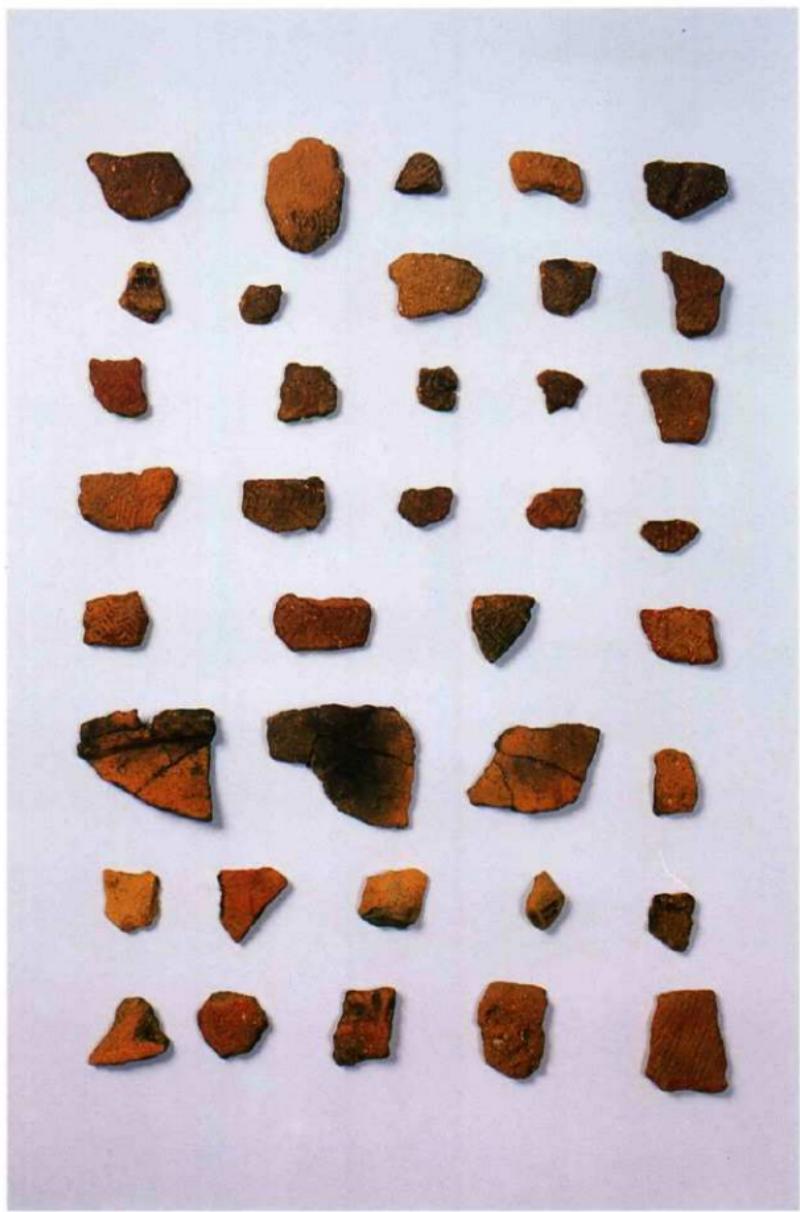
長野県下伊那地方事務所土地改良課  
長野県下伊那郡阿智村教育委員会



1. カヤハラ遺跡周辺の景観



2. 遺構 全体



3. 縄文時代早期土器片



4. 繩文時代早期變形土器（土壤21出土）

## 序 文

地元要望の強かった基盤整備事業が県営土地改良総合整備事業として、平成6年度から7年度にかけて大鹿地区と洞地区で実施されることとなりました。この事業は大鹿、洞地区を対象とした基盤整備事業で工事実施面積18.9haに及ぶ大規模の事業であります。

この付近には、埋蔵文化財の遺跡として、浜井場、池ヶ窪、ワケ畠、クリヤマ、上相沢、日ノ入、カヤハラ遺跡があり縄文時代・弥生時代の土器片、打製石斧、磨製石斧、石鍤等が採集されている埋蔵文化財包蔵地として重要な場所とされていました。中でも今回の事業で発掘調査の対象となった池ヶ窪遺跡とカヤハラ遺跡の調査については、基盤整備事業の工事に先立ち、阿智村教育委員会として下伊那地方事務所、県教育委員会文化課、阿智村役場と協議致しまして、現地の試掘調査を平成5年12月11日から実施しました。その結果、池ヶ窪遺跡からの遺物の確認はできませんでしたが、カヤハラ遺跡から縄文時代早期押型文土器片2点、縄文時代中期後葉土器片約40点、石鍤、焼土を伴う集石状遺構等が確認され、その後県文化課との現地査察の結果、本格的な発掘調査を実施し記録保存を行う事となりました。

県営土地改良総合整備事業の工程もあり、カヤハラ遺跡本調査の発掘は平成6年6月6日から7月21日までの約1ヶ月半に渡る長い間実施されました。調査担当者として長年阿智村文化財に深い関心を頂いております、今村善興先生に格別な御理解を頂き御協力を頂きました。また、調査員、補助員につきましても、村の文化財委員の方々にお願いし調査態勢ができ無事完了いたしました事を感謝申し上げます。

発掘調査の結果につきましては、本文中にもありますように、縄文時代早期の集石炉、土壤、土器片、縄文時代中期の竪穴式住居城址、方形配列土壤群、縄文時代後期の土壤、土器片、平安時代の須恵器片、灰釉陶器片等広範囲のものが発見されております。

報告書発行に当たりまして、献身的に調査を推進して頂きました今村調査団長、調査員、調査補助員、発掘調査に専念頂きました関係者の皆様、発掘調査実施に当たり格別な御理解御支援を頂きました近隣の方々に厚く御礼申し上げます。

平成7年3月

阿智村教育委員会

教育長 高坂耘平

## 例　　言

1. 本報告書は、平成6年阿智村教育委員会が実施した、阿智村伍和大鹿地籍の県営土地改良総合整備事業に先立つ、阿智村伍和大鹿地籍池ヶ窪・カヤハラ遺跡の試掘調査・発掘調査報告書である。
2. カヤハラ遺跡の発掘調査は、長野県地方事務所長と阿智村村長の委託契約に基づき、阿智村教育委員会が委嘱した特設のカヤハラ遺跡発掘調査団が当たっている。
3. 調査担当者の業務上の都合により、測量作業はKKジャスティックに委託し、出土遺物の出土点記録・遺構の空中写真測量を採用している。調査地の基準線は、原耕地の中央C地区の中ほどにはば南北方向に任意の基準線を設け、上段からA・B・C・D・Eの調査区を設定している。
4. 阿智村伍和地籍は埋蔵文化財包蔵地の詳細分布調査が行われていないので、伍和地籍内遺跡一覧表は、旧来のものを使用し、遺跡範囲も不詳のところが多いので、位置を基本にして試みに小林が作成している。
5. 本報告書の資料作成に当たっては、委託した測量図を基本にし、土層図等の記録は林・福田・三石・小林・原が分担している。遺構の現地写真撮影は今村が担当している。  
　遺物整理・遺物実測・整図・拓本撮りは今村・林・福田・三石があたり、土器実測は主として林が、石器実測は今村が、拓本撮り整図は三石・福田・今村が担当している。遺構整図・報告書編集・原稿執筆は主として今村が担当している。なお、調査経過・伍和地籍の環境については副団長小林が執筆している。
6. 伍和地籍の景観写真は原治幸氏に依頼し、遺物写真は唐木孝治に委託している。
7. 遺物・測量原図類・調査記録カード・写真関係資料は、阿智村教育委員会が保管している。

# 目 次

扉（カラー写真） (1) カヤハラ遺跡周辺の景観 (2) 遺構全体 (3) 縄文時代早期土器片

(4) 縄文時代早期壺形土器

序 文 阿智村教育委員会教育長  
例 言  
目 次

## I. 調査の経過

1. 試掘調査の経過 .....	1
2. カヤハラ遺跡本発掘調査の経過 .....	1
3. 調査団組織 .....	2

## II. カヤハラ遺跡周辺の環境

1. 周辺の自然環境 .....	4
2. 伍和地区的歴史環境（主として遺跡） .....	4
3. 伍和地区的文化財 .....	5

## III. 調査の結果

1. カヤハラ遺跡の位置と調査区 .....	10
2. 調査結果の概要 .....	10
3. 縄文時代早期集石炉 .....	15
(1) 集石炉 1	
(2) 集石炉 2	
(3) 集石炉 3	
(4) 集石炉 4	
(5) 集石炉 5	
4. 縄文時代早期の土壤 .....	16
(1) 土 壤 21	
(2) 土 壤 38	
(3) 土 壤 63	
5. 縄文時代早期土器片の出土地 .....	17
6. 縄文時代中期住居址 .....	17
(1) 1号住居址	
(2) 2号住居址	
(3) 3号住居址	
(4) 4号住居址	

(5) 5号住居址	
7. 縄文時代中期方形配列土壌群	26
8. 縄文時代中期以降の土壌	39
(1) A地区の土壌	
(2) B地区の土壌	
(3) C地区の土壌群	
(4) D・E地区の土壌群	
9. その他の遺構	40
10. 遺構以外出土の遺物	40

#### IV. 調査結果のまとめ

1. 縄文時代早期の遺構・遺物	48
2. 縄文時代中期の小集落	48
3. 方形配列土壌群	49
4. 伍和地籍の分布調査	49

### 挿 図

第1図 カヤハラ周辺の埋蔵文化財包蔵地図	8
第2図 大鹿地区土地改良地域と調査区	11
第3図 遺構全体図	13
第4図 A～C地区土器・石器出土状況	13
第5図 C地区北側集石炉と土壌群	18
第6図 C地区南側集石炉・土壌群	19
第7図 C地区集石炉1・2・3・4・5、土壌38・45・47・48・92	20
第8図 C:E地区出土押型文土器	21
第9図 土壌21出土土器	22
第10図 C地区出土条痕文・せんいの入った土器	23
第11図 1・2号住居址	28
第12図 1・2号住居址出土土器・石器	29
第13図 3・4・5号住居址	30
第14図 3・4号住居址出土土器	31
第15図 5号住居址出土器	32
第16図 1～4号住居址出土石器(1)	33
第17図 1～4号住居址出土石器(2)	34
第18図 5号住居址出土石器	35
第19図 A地区方形配列土壌群	41
第20図 方形配列土壌群出土土器	42

第21図	C・E地区土壤出土土器	43
第22図	A・C・E地区土壤出土石器	44
第23図	C・E地区土壤出土石器	45
第24図	C・E地区グリット出土土器	46
第25図	C・E地区グリット出土石器	47

## 写 真 図 版

写図1	カヤ原遺跡からの遠望	51
写図2	調査前のカヤハラ遺跡と遺構全景	52
写図3	カヤハラ遺跡遺構全景	53
写図4	C地区の遺構群（土壤群・集石群・2号住居址）	54
写図5	縄文時代早・前期の土器	55
写図6	集石炉1	56
写図7	集石炉2	57
写図8	集石炉3	58
写図9	集石炉4・5	59
写図10	土壤21出土土器	60
写図11	1号住居址	61
写図12	2号住居址	62
写図13	1・2・3号住居址出土土器	63
写図14	3号住居址	64
写図15	3号住居址	65
写図16	4号住居址	66
写図17	4号住居址・方形配列土壤群出土土器	67
写図18	5号住居址	68
写図19	5号住居址出土土器	69
写図20	方形配列土壤群の位置	70
写図21	方形配列土壤群	71
写図22	土壤3・8	72
写図23	土壤5・10の土層断面	73
写図24	土壤15・45	74
写図25	土壤48	75
写図26	土壤63・65	76
写図27	土壤・グリット出土土器	77
写図28	土壤8・78出土土器	78
写図29	硬砂岩・硅岩系の石器	79
写図30	領家片磨岩系の石器	80

写図31 小形石器と丸石	81
写図32 調査風景	82

## 表

表1 伍和地区埋蔵文化財包蔵地一覧	9
表2 「方形配列土壙群」土壙一覧	27
表3 阿智村カヤ原遺跡土壙一覧	36

## I. 調査の経過

### 1. 試掘調査の経過

#### 平成5年

- 4／19 県文化課小池指導主事来庁、阿智村文化財委員出席。阿智村産業課長より県営水田営農活性化基盤整備事業伍と地区的事業概要の説明を受ける。当該地区に、カヤハラ、池ヶ窪遺跡があり遺跡箇所の確認を行う。遺跡図の確認作業。
- 6／3 県文化課へ保護協議の派遣申請提出。
- 6／24 カヤハラ、池ヶ窪遺跡の保護協議を行う。
- 6／28 県教委文化課より保護協議結果の回答。5年度、試掘調査の実施。調査結果に基づき6年度には、発掘調査とする。
- 8／18 調査団長今村善興先生と試掘調査日程協議。
- 12／6 地方事務所へ計画書及び予算書を提出。
- 12／10 発掘調査委託契約を交わす。
- 12／11 カヤハラ、池ヶ窪遺跡へ資材搬入。
- 12／13 カヤハラ、池ヶ窪遺跡試掘調査開始。
- 12／23 調査団長と現地協議。
- 12／24 県文化課、地方事務所、村へ現地協議の派遣申請提出。

#### 平成6年

- 1／7 カヤハラ、池ヶ窪遺跡試掘結果確認。本調査協議。試掘調査終了。
- 1／8 整理作業に入る。
- 2／28 カヤハラ、池ヶ窪遺跡試掘調査完了届を提出する。

### 2. カヤハラ遺跡本発掘調査の経過

- 6／6 カヤハラ遺跡の本発掘調査が始まる。新井土木のバックホーによって表面の耕土を発掘予定地の北側へ除去を始める。作業員は平林へ、カヤ原には今村先生が立ち会い、早期土器の出土が見られた。
- 6／7 平林より発掘の諸道具及びテント等を運び、テント張りをして上段の桑及び水田跡の草を刈る。草丈1mの余（キジ出る）耕土の除去及草刈りに終日かかる。
- 6／8 耕土の除去及び除去したとの上面を削る。遺物の散乱が見られる。住居址1つ確認する。（3号）住居址。南信州田中氏来る。
- 6／11 遺跡をKAHの記号を決め、上段よりA・B・C・D・E地区の調査区に定める。B地区の発掘を始める。C地区から早期土器片がいくつか出土する。

- 6／14 A地区桑畠の表面を削る。C地区で早期の半完形と思われる土器を発見する。A地区で住居址と思われるのを発見する。(1号住居址)
- 6／16 A地区的表面を削る。
- 6／18 E地区的上面を削る。ジャスティックが測量に来る。
- 6／20 昨日の雨で地面がやわらかくなっているうちにとD地区・E地区的発掘をする。午後雨にて作業が中止になる。
- 6／21 E地区、D地区的発掘、午後A地区的土壤及び住居址の発掘を始める。2・1・11・5・10号土壤より土器多數出土する。
- 6／23 A地区的土壤は大きく広がり、柱列状に並んで見える。6つの土壤がセットになるみたいである。
- 6／28 方形配列土壤群と呼ぶ。その土壤及び住居址の発掘をする。2時頃雨で作業中止となる。
- 6／30 A地区的土壤を掘る。C地区的土壤の発掘が始まる
- 7／2 方形配列土壤群と5号住居の南側の土を工事のバックホーで除去してもらう。
- 7／5 5号住居址の横を削り始める。方形配列土壤群の発掘をする。
- 7／6 5号住居址の発掘を始める。新聞社来る。雨強く降って午前中で作業が中止となる。
- 7／7 方形配列土壤群の廻りの掃除、土壤の仕上げをする。
- 7／12 3号住居址はかたく水をまきシートをかぶせる。5号住居址炉の石組、焼土も出土する。
- 7／13 5号住居址を発掘する。「伍和を考える方」の人達、河内地区の人達20人ほど見学に来る。阿智村長、奥沢収入役る。
- 7／14 5号・3号住居址、E地区土壤及び1、4号住居址の炉を掘る。土壤63号で早期土器片が出土する。村議熊谷孝敬氏来る。産業課久保田、河合氏来る。
- 7／16 E地区的土壤を掘る。炭の混ったものも多く発見される。
- 7／18 E地区的土壤を掘る。午後草取りをする。
- 7／19 残りの土壤やピットの発掘をして、C地区・A地区的清掃をする。
- 7／21 遺跡全体の掃除、道具の片づけ、昼頃ジャスティックの空中撮影、午後2時よりの現地説明会には30名ほどの参加者がある。テント等一切の片づけをして自動車で運ぶ。

### 3. 調査団組織

#### (1) 試掘調査員

今村 善興・小林 昭治・原 治幸

#### (2) 本発掘調査団

調査団長 今村 善興(飯田市文化財審議委員)

調査員 小林 昭治・原 治幸(阿智村文化財委員)・林 貢・福田 千八

小林 薫・三石久男(下伊那考古学会員)

現地指導 小平 和夫(長野県教育委員会文化課指導主事)

協力作業員 斎藤 宗一・内田 義明・原 好文・原 誠・原 健・協坂 篤良

原 隆雄・園原 貢・沢井 好明・東谷 一郎・原 紀美子・小笠原美恵  
木下 照子

(3) 調査事務局

阿智村教育委員会教育長	高坂 耘平
" 社会教育係長	岡庭 敬芳
" 社会教育係	矢沢 敏勝
" 産業課長	井原 広次（平成 5 年度）
" "	久保田公夫（平成 6 年度）
" 土地改良係長	河合 隆文
" 土地改良係	熊谷 正俊

## II. カヤハラ遺跡周辺の環境

### 1. 周辺の自然環境

カヤハラ遺跡は、阿智村伍和地区大鹿地籍にある。伍和地区は阿知川の南側に位置し、阿智村の中心部駒場地区の対岸にあって、多くは台地と扇状地で西側日の入山地より東方に広がっている。その東側は飯田市三穂と隣している。南はうぐす川をもって下條村と隣接し、西は日の入山地をもって阿智村大野・浪合村と隣接している。

大鹿地籍は伍和中心部寄りにあって、日の入山地の東麓の扇状地で、西から東に広がっていて南の河内川、北の相沢川の両河川にはさまれている。

本遺跡はカヤハラの一部分でカヤハラの南面にあたり、河内川に向って突出した台地で南東に向ってゆるい傾斜となっている。西側には小さな沢があり清水も出ている。地味は赤土で粘質のようであるが排水は良く、発掘中に掘り上げた遺構などに降った雨も溜まった水もすぐに排出して、長い時間水が溜まっているということは見られなかった。

又このカヤハラの西側は日の入山地でそばだつ山裾へとすぐに続いている。

北は中央アルプスの駒ヶ岳・風越山などの諸山、飯田市街地・山本地区・阿智村中心部駒場・春日地区が一望できる。

東は南アルプスの全峰・八ヶ岳等の諏訪の山々など、竜東の山々、目前には阿智第二小学校を始め伍和地区の民家及び有力耕地が広がって見える。

南は下条山脈の山々及び極楽峠、遠くより下条村上段の扇状地、伍和地区に入って栗矢・寺尾・原の平などの扇状地が広々と横たわって見える。

このようにカヤハラは非常に眺望が良く、元旦には初日の出の運程に地区の人々が大勢おとずれるそうである。

### 2. 伍和地区の歴史環境（主として遺跡・文化財）

阿智村伍和地区は、明治8年に当時の向閑村・栗矢村・備中原村・河内村・大鹿倉村の5か村が合併して伍和村となって、昭和31年阿智村に合併するまで81年間続いた。

カヤハラ遺跡の所在する大鹿地籍は江戸時代には大鹿倉村といわれ徳川幕府直轄の天領の村であったが、山付けのたいへんに小さな村で、延宝5年（1677年）には戸数8戸で明治3年には戸数15戸で人数は86人であった。

大鹿地籍及びカヤハラ近辺の阿智村で登録されている遺跡を大鹿地籍の北側より列挙すると、

- ・浜井場遺跡 繩文時代中期土器片と打製石斧及び弥生時代後期土器片が採集されている。
- ・池ヶ窪遺跡 繩文時代中期・後期土器片・打製石斧・磨製石斧・石匙・石棒・弥生時代後期土器片が採集されている。
- ・ワケ畠遺跡 繩文時代打製石斧・磨製石斧が採集されている。

- ・クリヤマ遺跡 繩文時代中期の土器片が採集されている。
- ・上相沢遺跡 繩文時代中期土器片と打製石斧が採集されている。
- ・日の入遺跡 繩文時代中期土器片・打製石斧・石錐・弥生時代後期土器片が採集されている。
- ・カヤハラ遺跡 繩文時代中期土器片・打製石斧が採集されている。今回発掘調査した場所である。今回の発掘調査の結果、繩文時代早期・前期・中期・後期、平安時代の灰釉陶器片が出土し、多くの遺構が検出されている。
- ・大鹿遺跡 繩文時代中期土器片・打製石斧・磨製石斧・弥生時代後期土器片・古墳時代土師器片が採集されている。

次は大鹿地籍では無いがカヤハラ遺跡と河内川をはさんで相対する遺跡を挙げると

・塚本遺跡 塚本古墳（円墳で径8.8m高さ2m）・繩文時代中期土器片・打製石斧・石皿・弥生時代前期土器片・古墳時代土師器片が採集されており、石皿は阿智第二小学校に所蔵されているが、安山岩製の有脚石皿でその形態から繩文時代後期と考えられる。弥生時代前期の土器は水神平式と呼ばれ東海地方に分布の中心をおいた土器である。

- ・アレ田遺跡 繩文時代中期土器片と石匙が採集されている。
- ・餅倉遺跡 繩文中期土器片と石匙が採集されている。

以上の遺跡がカヤハラ遺跡を中心に指揮の間に取りまいている。

カヤハラ遺跡の南側の河内川端を川添いに西上すると日の入山の南尾根越田峠に出て、阿智村智里大野に至る。そして中野・奥根木・藤の戸・網掛山麓の中平と古代東山道の道筋につながる。往古東山道の枝道として下条・阿南町方面にこのルートがあったのではないかとこの付近の遺物・地形などから見て一考できる。

カヤハラの東地続きの所に少し、小高くなった森があり、土地の人々が六人塚と呼び、昔戦国の頃6人の武士がここで腹を切って埋められた所として小さな祠を立て祀ってあり、この境内の木を切ると祟りがあると伝えられている。

カヤハラは、明治後半までは畠と原野であった。明治32年恩田井水の開さくによって水が豊富に使用できるようになり此の広いカヤハラは開田されそのほとんどが水田化された。

### 3. 伍和地区的文化財

#### (1) 宗円寺の宮崎氏墓所

所在地 伍和1532番地（宗円寺境内）

所有者 宗円寺

江戸時代初頭から宝永4年（1707）まで向閑村の領主であった旗本宮崎氏の墓所である。

向閑宮崎家は宮崎氏宗家の家系で、天正16年（1588）父泰景と共に徳川家康の直参となった半兵衛泰重のころから向閑村に住んだようであるが、泰重は家康に従って江戸に赴き関東在封中に没したので、当寺には2代半兵衛重次以降の4代が葬られている。



宗円寺の宮崎氏墓所

重次の法名「宗円」が当寺の寺号となっている。

#### (2) 普門院石仏群（三十三所観音）

所在地 伍和3259番地2（普門院境内）

所有者 備中原部落

普門院は備中原にあり、飯田市立石の立石寺を一番とする伊那西国観音霊場の第二番札所である。この三十三所観音石仏は、観世音菩薩が三十三種の変化身となって民衆を救うという説に因るもので、三十三体はそれぞれ光背型の石に浮彫されているが、三十三種類の観音像でなく、聖・如意輪・千手・馬頭などの観音像を主として構成されている。

この石仏群は、多分阿知川の元橋からこの普門院に至る間の山路に配置されていたものと思われるが、明治以降のある時期に集め置かれたものと推定される。中央に丸彫りの地蔵菩薩座像があり、天明二年の刻字があるが、これは観音石仏とセットで造立されたものではなく、集積の際の構成配置と思われる。



普門院石仏群

#### (3) 栗矢回り舞台

所在地 伍和6482番地2（栗矢八幡社境内）

所有者 栗矢区

栗矢の八幡社の境内にある、間口九間、奥行六間（16.4m×10.9m）の入母屋造りの二階建、瓦ぶきの堂々たる建造物である。棟札によると、安政5戌年（1858）桃浪（3月）吉祥日の上棟とあって世話人7人の名を記してあるが、大工の名は不明である。

この舞台は、入会山の割山の相談の折に建設の話がまとまったといわれ、原昌二氏の「はなれ」をモデルにして建てたという。当時の栗矢村は36戸で八幡社境内の社木を使用する方向へ切り倒して用材にしたとの伝承がある。

内部は「上まわし」という形式の回り舞台で、保存がよく復元も可能であると建築専門家や人間国宝の俳優片岡仁左衛門の見学談がある。



栗矢の回り舞台

#### (4) 斗字庚申

所在地 伍和5587番地22（河内 洞）

所有者 原祐次

河内川橋の下流200mほどの南岸にある、高さ3.3m、幅3.6m、厚さ2mの巨大な庚申碑である。ここは、かつて駒場から下条方面へ通ずる「下条街道」が通っていたところで、その古道に面してあつらえたように露出した花崗岩の、東天を仰いだ平面へ、幅90cmの大文字を「庚申」と彫りつけたも

ので、二字の丈は180cm、文字の深さと幅がともに10cm以上あり（最深部12.5cm）この一文字に一斗の米が入るところから「斗字庚申」と呼んでいる。

碑面には「寛政十二天（年）十二月日」という建立の年月と、「村中」という建立施主の刻字がある。この年は庚申の年である。

#### (5) 伊賀良神社の参道並木

所在地 伍和7564番地（伊賀良社参道）

所有者 伊賀良神社

寺尾部落の奥まった所、村道の右側に伊賀良神社の標柱・鳥居・旗桟及び土蔵が立っている。ここから西へ下条山脈の山裾のゆるやかな傾斜を上りながら前宮社殿までの398mが並木の参道で、幅員は平均2mほどであるが桧・杉の目通り250cm以上、赤松の目通り300cm以上の老樹巨木が数多く見られ実に見事であると共に莊厳を感じさせる。

並木を構成している樹木は（目通り周囲80cm以上のもの）176本が数えられる。

その内訳は桧117本・杉29本・赤松12本・梅8本・樅6本・櫻4本で桧を主とした並木である。

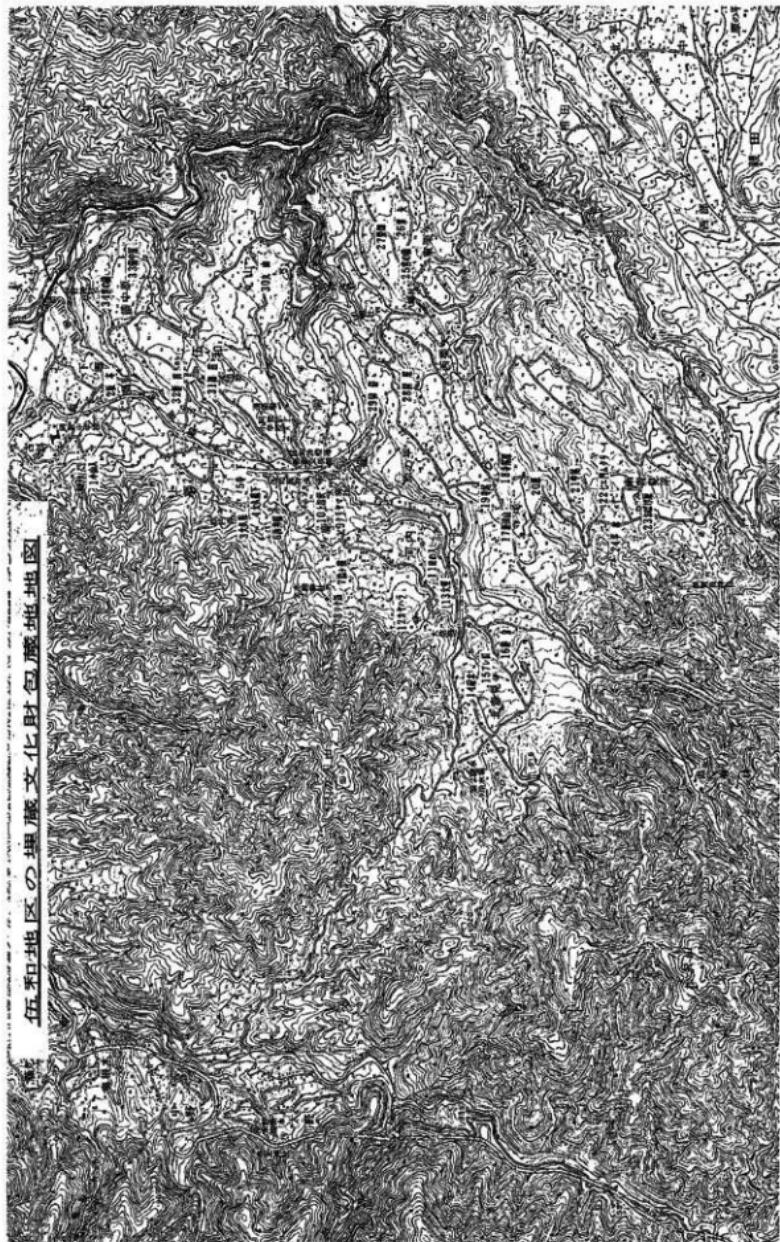


斗字庚申



伊賀良神社の参道並木

第1図 カヤハラ周辺の埋蔵文化財発掘地図



五和地区の埋蔵文化財発掘地図

表1 伍和地区埋蔵文化財包蔵地一覧

村番号	県登録番号	遺跡名	所在地	旧石器	縄文時代		弥生時代		古墳時代		奈良時代		中世	備考	
					草	早前	中後	晚	前	中後	前	中後			
伍1	3101	小山入遺跡	伍和古科			○								○	平安須恵唯一
〃2	3130	坂本	"下郷			○									
〃3	3105	大久保	"上郷			○									
〃4		大久保下	"上郷			○○									
〃5	3106	寺下	"上郷			○○									
〃6	3107	浜井場	"大鹿			○			○						
〃7	3102	池ヶ窪	"大鹿			○○			○					石碑	
〃8		ワケ畠	"大鹿			○									
〃9	3108	クリヤマ	"大鹿			○									
〃10	3108	上相沢	"大鹿			○									
〃11	3119	日の入	"大鹿			○○			○						
〃12	3103	カヤハラ	"大鹿			○○○○							○		
〃13	3104	大鹿	"大鹿			○			○	○					
〃14	3110	塚本	"青見平			○		○	○	○				円墳・石碑	
〃15	3116	アレ田	"青見平			○									
〃16	3117	餅倉	"河内			○									
〃17	3120	新田山	"河内			○									
〃18	3125	寺尾原	"寺尾			○○									
〃19		寺尾	"寺尾								○			円筒埴輪	
〃20		中尾	"寺尾			○								土偶	
〃21	3121	原	"寺尾			○									
〃22	3124	七箇門ムクリ	"寺尾			○○									
〃23	3123	おばけ原	"寺尾			○○				○	○				
〃24	3122	平林	"寺尾			○								有頭石棒	
〃25	3126	宮の前	"栗矢			○									
〃26	3128	栗矢	"栗矢			○								石棒	
〃27	3129	梨畠	"栗矢			○									
〃28	3149	桐原	"栗矢			○									
〃29	3127	切跡	"栗矢			○									
〃30	3115	丸山	"丸山			○○								試掘調査済み	
〃31	3113	細窪	"備中原			○									
〃32	3112	新田	"備中原			○				○					
〃33	3114	備中原	"備中原			○○				○				独鉢石・磨製砲丁	
〃34	3111	宮の前	"備中原			○○		○							

### III. 調査の結果

#### 1. カヤハラ遺跡の位置と調査区

カヤハラ遺跡は阿智村伍和大鹿地籍の西側上方に位置する。今回遺構群が検出されたところは、寺尾原との間を東流する河内川に南面する台地上に位置して、標高は750mほどある。この地域一帯は南東に傾斜する地形であって、以前の耕地造成作業によって段差を持つ水田が幾段にも続くところで、土堤の高さは低いところで2~3m、上方の高いところでは8mを越えるところもある。この水田地帯の上方からは山地帯が続き、西側一帯は日の入山地となっている。浪合村恩田から引水する恩田用水による開田の進んだところでもある。眺望のきくところで、北には中央アルプスの駒ヶ岳や風越山の山々、飯田の市街地から阿智村の中心地が一望できる。東側は南アルプスの連峰が眺められ、天候の好い時には諏訪地方の八ヶ岳等も遠望できる。南側は下条山脈の山々から極楽峠やその山麓に広がる下條村の扇状地が見渡せるところで、地域の人々が初日の出を拝む場所にもなっている。

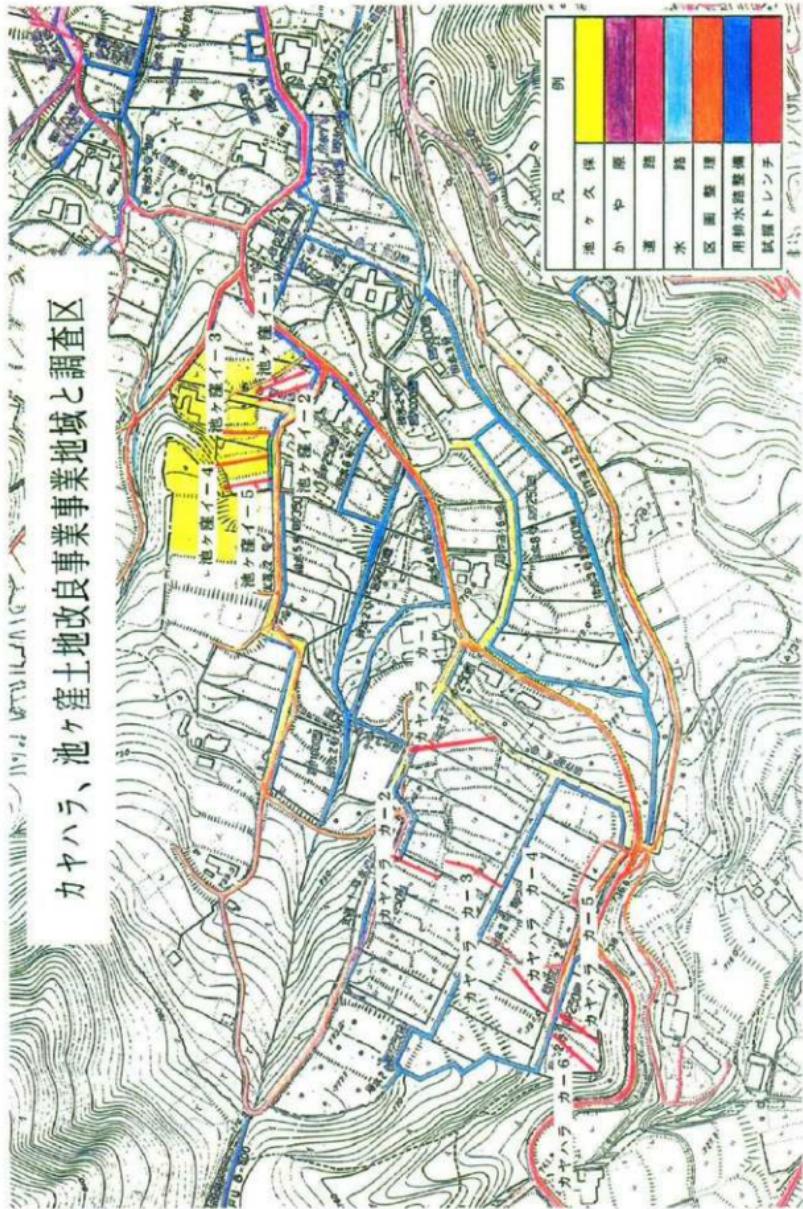
遺構が検出されたところはこの台地の上方南端付近にあって、南側に突出するように緩傾斜面が広がり、その南側は急崖となって河内川の谷へ落ち込んでいる。この標高差は40mほどある。原地形は、最上段が桑畑、その下方は5段に及ぶ水田が造成され、2mに及ぶ土堤のあるところもある。調査区を原耕地ごとに区分をし、上方からA・B・C・D・E地区とし、C地区のほぼ中央に南北方向に基準線（全体測量図50ライン）を設け、ここから東側は2m単位にY・X・W・V……列、西上方へA・B・C・D……とし、南側から1~20のグリッドを設定している。

#### 2. 調査結果の概要

地区別の遺構をみると、上段のA地区では1号住居址と方形配列土壙群（土壙1~12）が検出されたが、その上方では遺物・遺構の発見はなかった。その下段のB地区は土地造成の掘削が進み、土壙4基のほかは遺構検出が少ない。僅かな段差を持って東側に続くC地区は遺物出土も多く、2・4号住居址のほかに集石炉5基、土壙40基以上・ピット群が集中し、縄文時代早期押型文・条痕文土器が集中的に出土する地点が何か所かあった。この下段がD地区であるが、1.5mほどの段差があつて表土が大きく削られていてるために遺構の下面しか残されていないが、2号住居址のほか土壙が10基ほど検出されている。この下方のE地区は傾斜が強めな地形で覆土も厚いため、遺物出土も多く、5号住居址と25基ほどの土壙が検出されている。この地区的土壙の中には、縄文時代早期の遺物出土のもの、縄文時代後期の遺物出土のものも含まれている。

##### (1) 検出された主な遺構

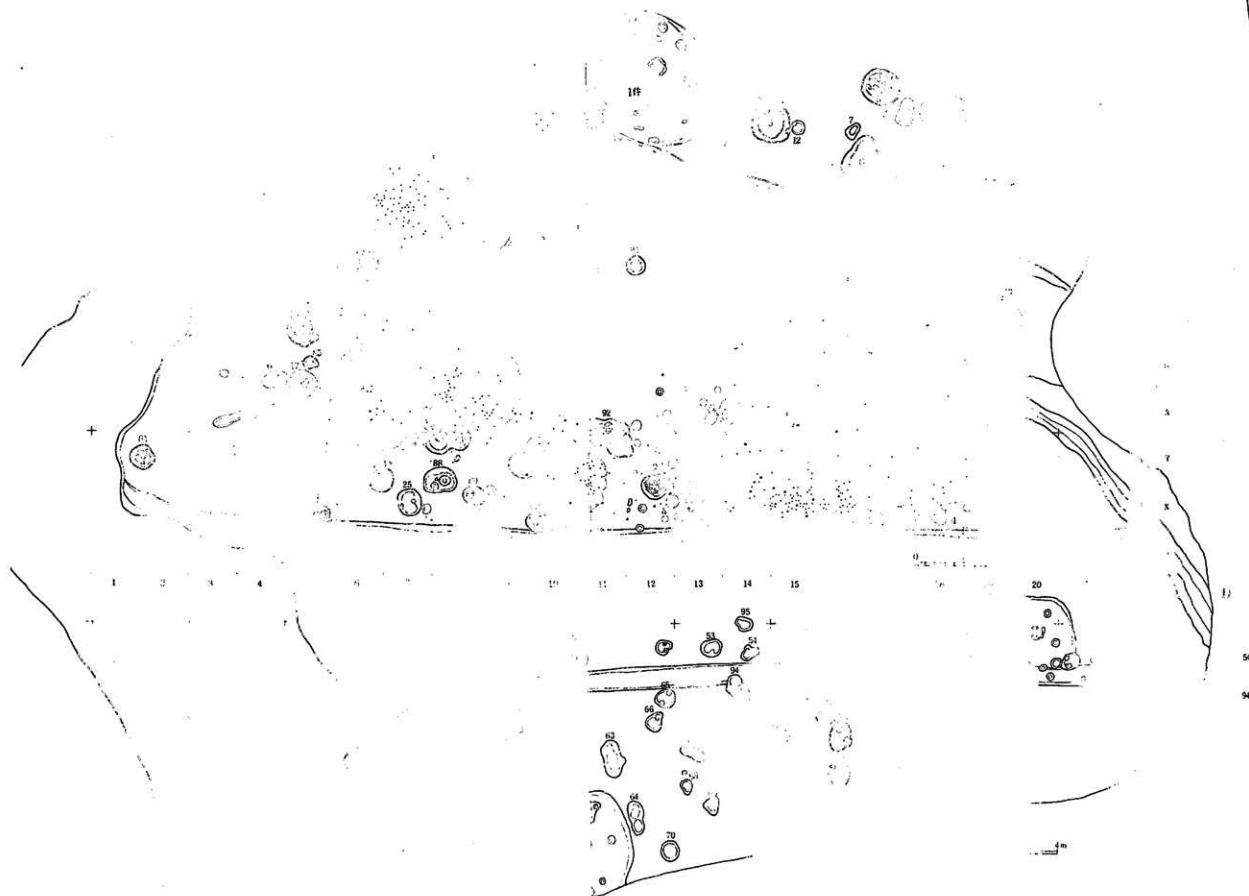
縄文時代早期と思われる集石炉5、縄文時代早期の土壙3以上、縄文時代中期の住居址5、同中期の土壙70以上、縄文時代後期の土壙1、縄文時代と思われるピット40以上、近世と思われる竪穴址1、近代かと思われる溝状遺構1。



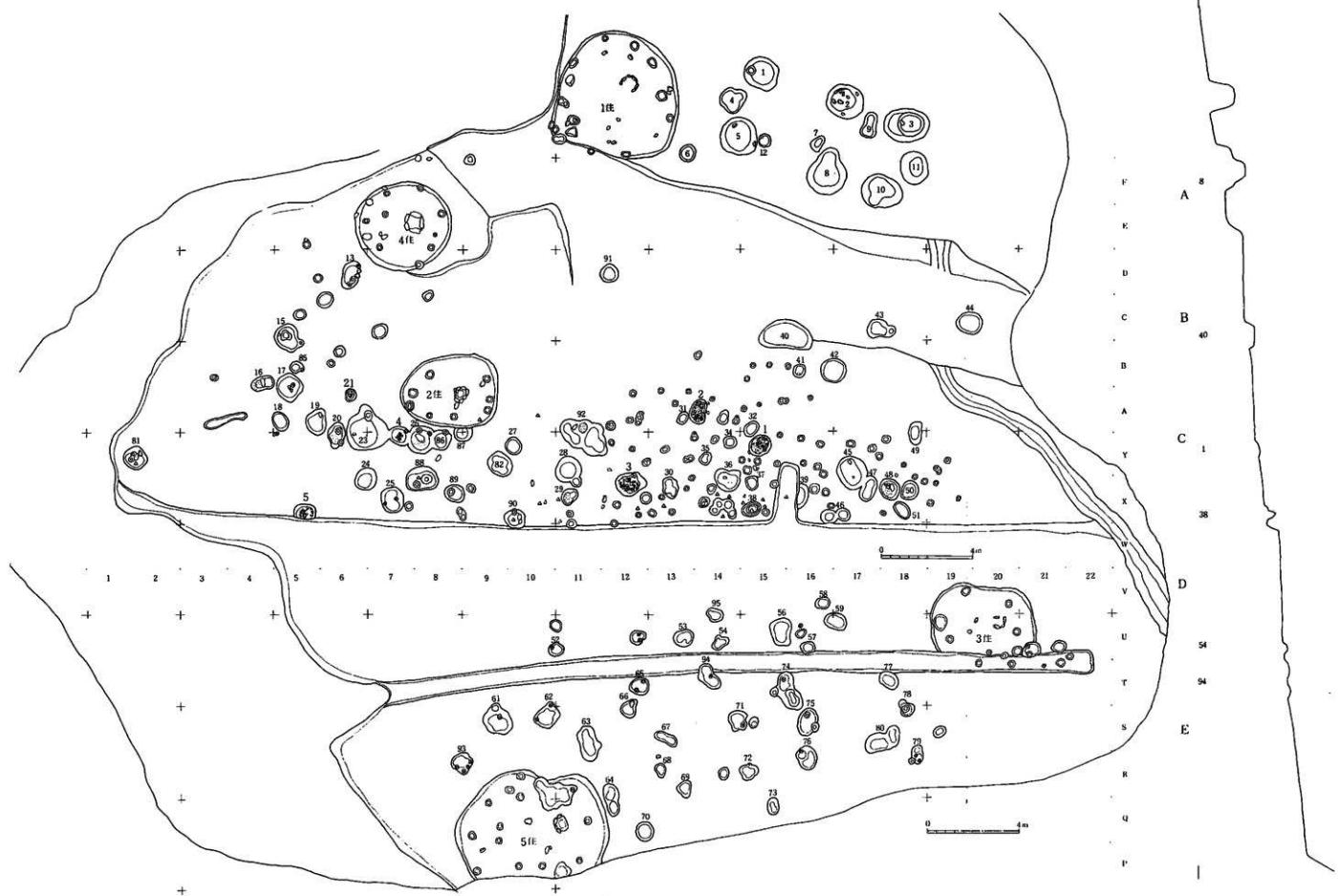
第2図 大鹿地区土地改良地域と調査区



第4図 A～C地区土器・石器出土状況



第4図 A～C地区土器・石器出土状況  
J図 遺構全体図



第3図 造構全体図

## (2) 発見された主な遺物

縄文時代早期末条痕文壺形土器（半完形）1、押型文・条痕文土器・繊維を含む土器片50、縄文時代前期土器片10、縄文時代中期壺形土器（半完形）3、同時代中期土器片500以上、縄文時代後期土器片10、縄文時代石器200、平安時代灰釉陶器片2。

## 3. 縄文時代早期集石炉（第3・4・5・6・7図）

縄文時代早期ではなかろうかと思われる集石炉が、C地区の中央部北側と南側に散在する形で5基検出されている。深い土壌を掘り焼き石を幾重にも重ねた形態のものではなく、縄文時代早期の土器片が検出されたのは集石炉1に過ぎないが、周辺から縄文時代早期の押型文土器片・条痕文土器片が出土していること・2~3重に積み重ねた石は焼けていること・石間や下層に焼土と炭塊が多いことから縄文時代早期の集石炉と扱っている。

### (1) 集石炉1（第5・7・8図、写図6）

Y15で検出された集石炉で、長径1m・短径75cmの範囲に、表面でやく50個の拳大の焼け石が不規則に並び、下層には2~3重程度の石が重なり、検出面の25cmほど下層に焼土と炭塊が検出されている。検出時の始めに山形文の押型文土器片（第8図11）が出土したほかは、土器片・石器は検出されていない。C地区の上方に位置していることから、水田造成のおりに上面が削り取られたようにも思われる。

### (2) 集石炉2（第5・7・10図、写図7）

集石炉1の南西2.2m離れた位置にあり、長径1m・短径65cmの範囲に、表面でやく30個の拳大以下の焼け石が露出した。上面の覆土を取り除くと拳大から人頭大に近い石が重なり、焼土や炭塊が検出されている。深さは30cm程度で、炭を含む黒色土の下は黄褐色の地山である。土器片・石器は発見されていない。集石炉1と同様水田造成のおりに上面が削り取られたものと思われる。

### (3) 集石炉3（第5・7図、写図8）

集石炉1・2の南4mほど離れたところに、長径1.25cm・短径1mの範囲に、表面では20個ほどの拳大以下の焼け石が露出していた。掘り下げてみると石の数は増え、大きさも拳大から人頭大のものが2~3重に重なり、石間には炭を含む黒色土が充満し、各所から焼土が検出されている。やく40cm下層には焼土が多く堆積し、その厚さも5cmほどあるところもある。2か所ほどに炭を含む黒色土の入った窪みが検出されている。窪みまで含めると40~50cmほどの深さがある。土器片や石器は検出されていない。集石炉1・2に比べると焼け石の数も多く集石層も厚いが、総体的には浅めの集石炉である。集石炉1・2を含めて周囲にピットが取り巻くように思えるが、集石炉に付随するもののかどうかは確かめられない。集石炉1・2・3の周辺には、縄文時代早期の押型文土器を伴う土壌は3基（土壤36・38・41）があり、南側一帯から押型文土器片20点ほどが発見されている。

#### (4) 集石炉4（第6・7図、写図9）

C地区の南側、2号住居址の東側にあり、長径90cm・短径70cmの範囲に拳大の焼け石が10個ほど検出された。下層には重なるように石は存在しないが、炭塊・焼土は検出されている。土壌の深さは20cm程度である。この周辺には土壌20・23・26・86が切り合うように並び、炭の多く入った土壌もあった。2mほど西には表裏条痕文の壺形土器を伴う土壌21があり、この周辺から条痕文土器片が多く出土している。

#### (5) 集石炉5（第6・7図、写図9）

集石炉4から南側5mほど離れたところに、土堤で半分切られた長さ80cmほどの集石炉である。表面を少し掘り下げたところに30個ほどの集石がある。切られた土堤でその断面をみると、焼け石の重なりは少なく、焼土や炭も多くない。石器の出土はあったが、土器は発見されていない。集石炉4と共に周辺にはピットが検出されていない。

集石炉は5基検出されたが、集石炉1・2・3と集石炉4・5を比べてみると、集石の状態・焼土や炭の混入状況・周辺のピットのあり方・周辺から出土する押型文土器と条痕文土器の分布に相違がみられる。

### 4. 縄文時代早期の土壌（第3・4図）

第3・4図にあるように、縄文時代早期の押型文土器や表裏条痕文土器片が出土した土壌は、C地区に多くE地区に一部検出されている。C地区では、南側から土壌81・15・21・88・90・36・38・41の8基で、E地区では土壌61・63の2基で合わせて10基である。これらが全て縄文時代早期とは言いがたいが、土器の出土状況・土壌の形態・覆土の状況等から土壌21・38・63は有力と思われる。

#### (1) 土壌21（第6・9・10・23図、写図10、口絵）

C地区南側A6で検出された土壌で、10cmほどの浅い穴の中に表裏条痕文の壺形土器半個体が、写図10のように横倒しに埋められていた。覆土には炭が含まれていたが、焼土は検出されていない。この土器は一個には復元されないが、口径29cmほどと推定され、筒形の土器と思われる。口辺に押圧突起が付けられ、肩部から底近くまで斜めの条痕文が施され、裏面には傾斜の緩やかな条痕文が部分的に付けられ、ところによっては無文で凹凸の多い器面のところがある。早期末の土器かと思われる。この土器の近くから珪岩又は安山岩製と黒曜石の剥片石器（第23図4・5）が出土している。この周辺からは同様の条痕文土器片を伴う土壌81・15・88・90や集石炉4・5が散在し、数点の条痕文土器片が発見されている。

#### (2) 土壌38（第5・8図）

C地区北側X15で検出された土壌で、長径80cm・短径60cmの梢円形で深さ45cmあり、二重構造を呈している。この付近の土壌では深い方で、中層から押型文土器片が2点と前期かと思われる縄文の土器片が出土している。第8図1の土器がそれで、比較的大形な土器片である。この土壌が縄文時代早期かどうか不詳であるが、この周辺から数点の押型文土器片が発見されているので、関係が深いと思

われる。なお、西側・南側にある土壌からも押型文土器片が出ている。

### (3) 土壌63 (第3・8図、写図26)

E地区S11(5号住居址の北西)で検出された土壌で、長径1.5m・短径80cm・深さ45cmほどの横円形の土壌で、覆土は上層は黒色土、中層からは茶褐色である。炭が少しみられたが、石や焼土は検出されない。縄文時代早期の押型文土器片4点と中期の土器片が1点出土している。第8図2の土器は上層から出土したもので、3は下層から出土している。早期の土器片が出土した土壌の中で、点数でも出土位置からでも早期の土壌とする条件は揃っている。この土壌の西南3m離れたところに土壌61がある。ここからも押型文土器片が出土し、緑色片岩製の小形な石匙(第23図7)が出土している。なお、土壌63・61ともに縄文時代中期の土器片が出土しているが、上層からであった。

## 5. 縄文時代早期土器片の出土地 (第4・5・6図)

今までに紹介した縄文時代早期の土器片を伴う土壌のほかに、C地区では20点ほどの押型文土器・条痕文土器片が出土している。押型文土器はX列10から15にかけて16点ほど出土し、とくに14・15に集中している。第8図でみられるように、5~7はX11、8・9はX12、10はX13、11~15はX14、16~21はX15、23はX16から出土したものである。22・24は試掘調査で出土してもので、XまたはY列かと思われる。Y列から西側では2点ほどに留まっている。1~24の土器片は全て山形文の押型文土器であるが、25は格子状の押型文土器で2号住居址覆土中から検出されている。

条痕文系・繊維を含む無文の土器片は北側土壌21の周辺に多い。第10図1・2は表裏条痕文土器、3~10・20は繊維を含む無文の土器片で、6・7は尖り底に近い平底の土器である。A・Y列の6を中心にして発見されている。

前期に近い土器と思われものは、X・Y列14・15に多く出土している。14~18がそれである。

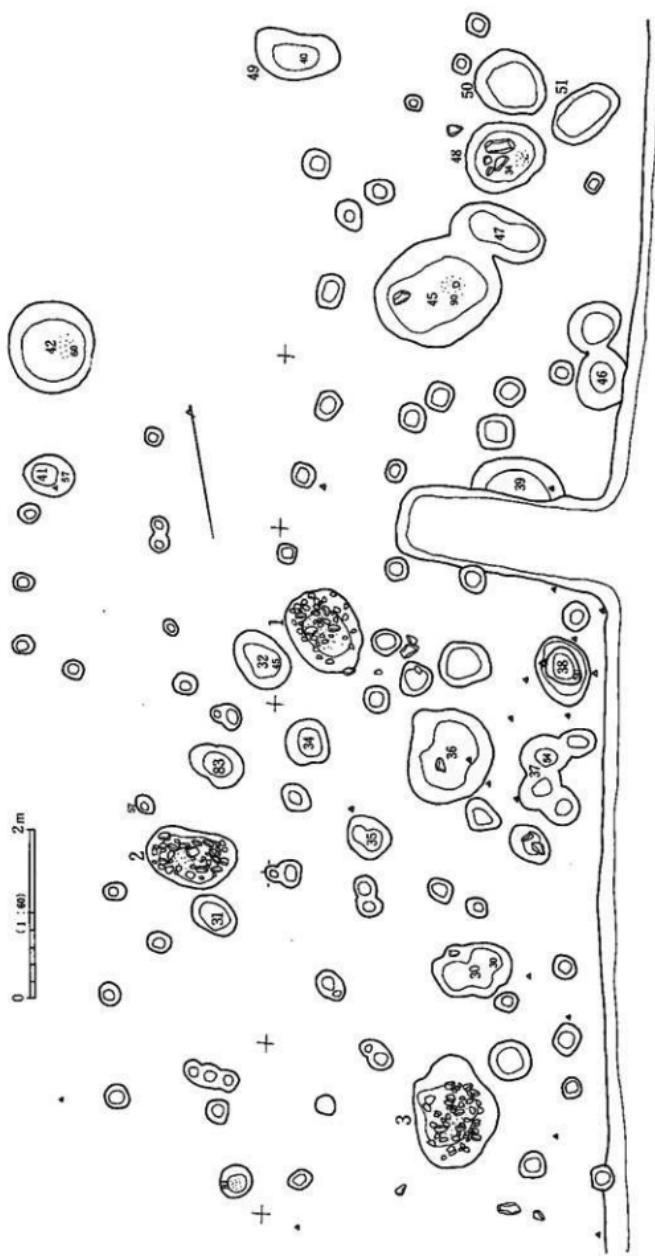
## 6. 縄文時代中期住居址

縄文時代中期の住居址は、A地区に1基・B地区に1基・C地区に1基・D地区に1基・E地区に1基と散在して検出されている。住居址の形態・出土土器の様相から3時期くらいにわたるように思われる。

### (1) 1号住居址 (第11・12・16・17図、写図11・13)

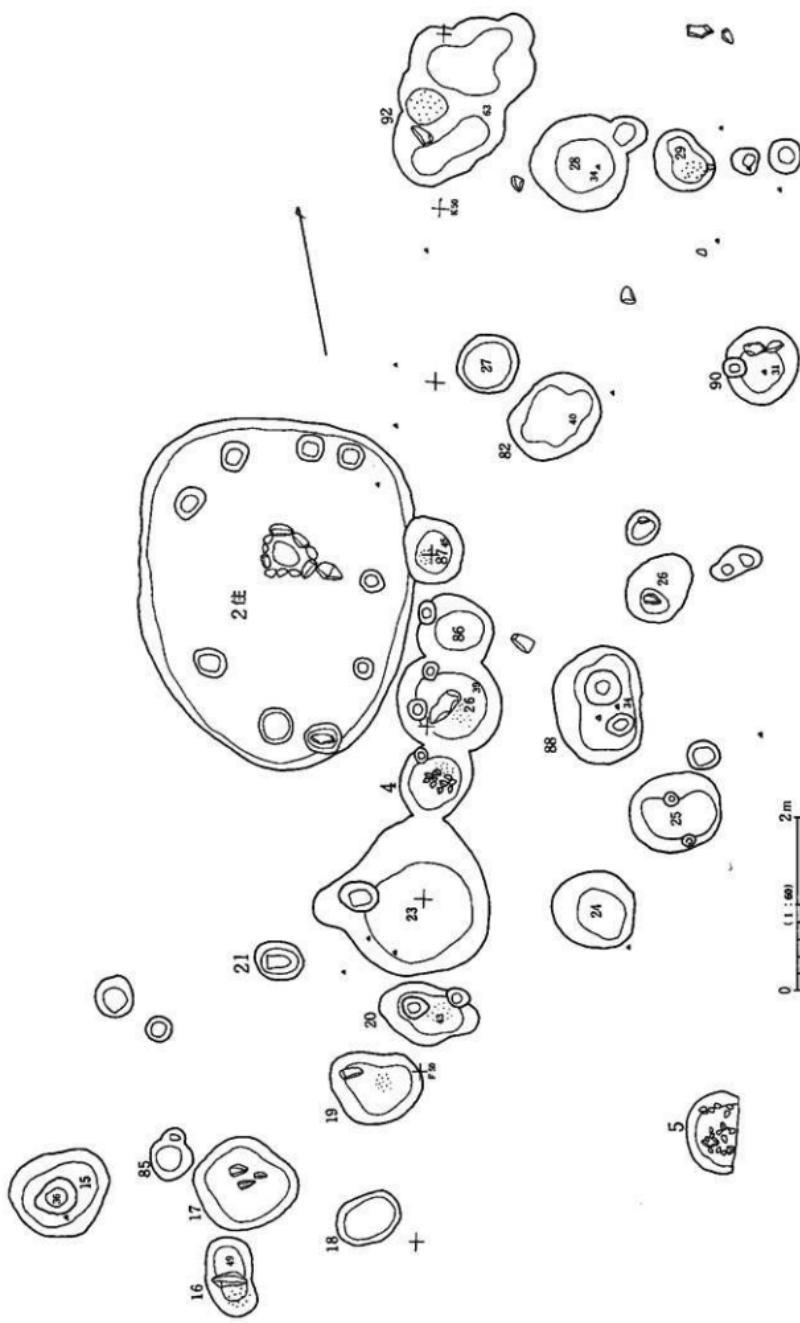
A地区南側で検出された竪穴式住居址で、東側の一部は耕作により削り取られている。竪穴のプランは5.6mほどの円形かと思われるが、東側が一部削り取られているので変形した形にみられる。主軸方向はN33°Wで、壁高は北西側で30cmを測るが、南東側は削られて不詳である。竪穴の掘り方は傾斜を持って掘り込まれている。床面は地形傾斜に沿うように斜めで、西側は堅く構築されていたが東側は軟弱ぎみである。ピットは竪穴内を取り巻くように13個検出されているが、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>はそれぞれ深さ51・50・56・58・32cmあって、5本ほどの主柱穴が取り巻いている。ほかのピットは補助柱穴かと思われるが、P<sub>6</sub>は土壌状の浅い穴でその横に、壺形土器の半個体が横倒しに

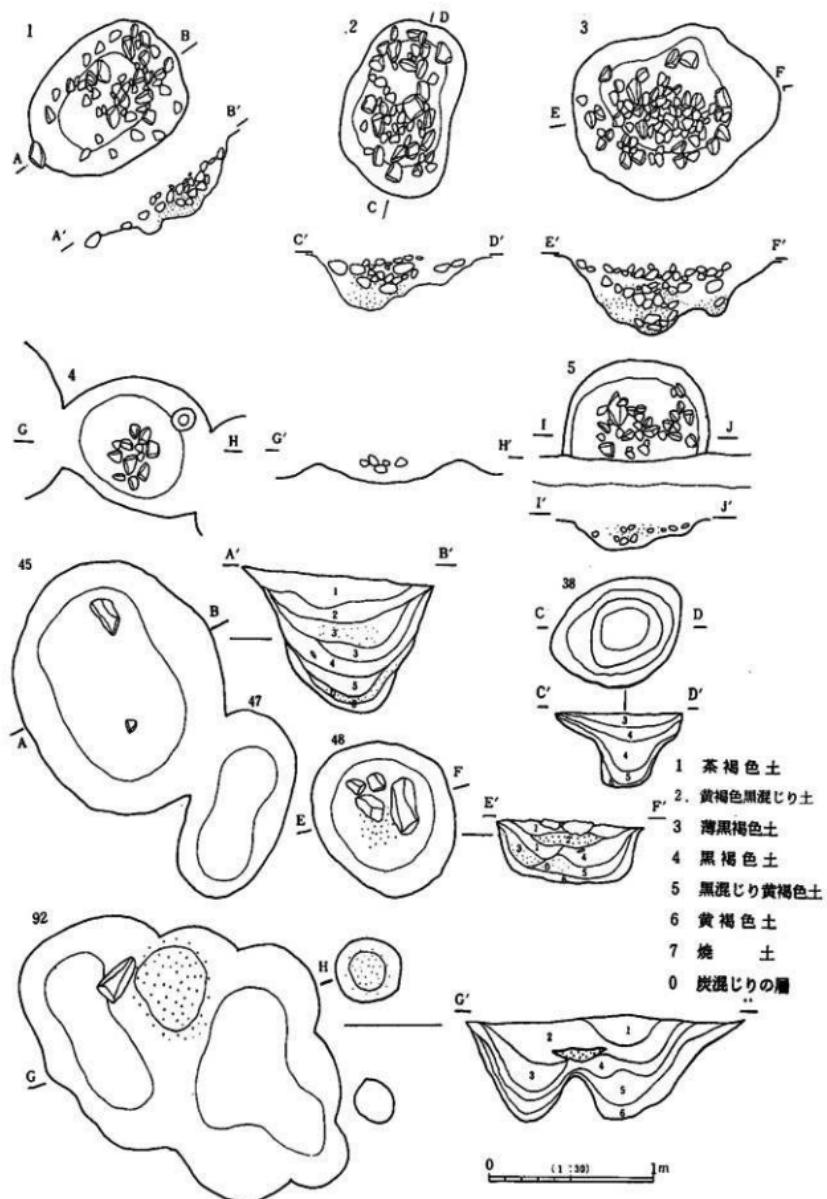
第5図 C地区北側集石炉と土焼群



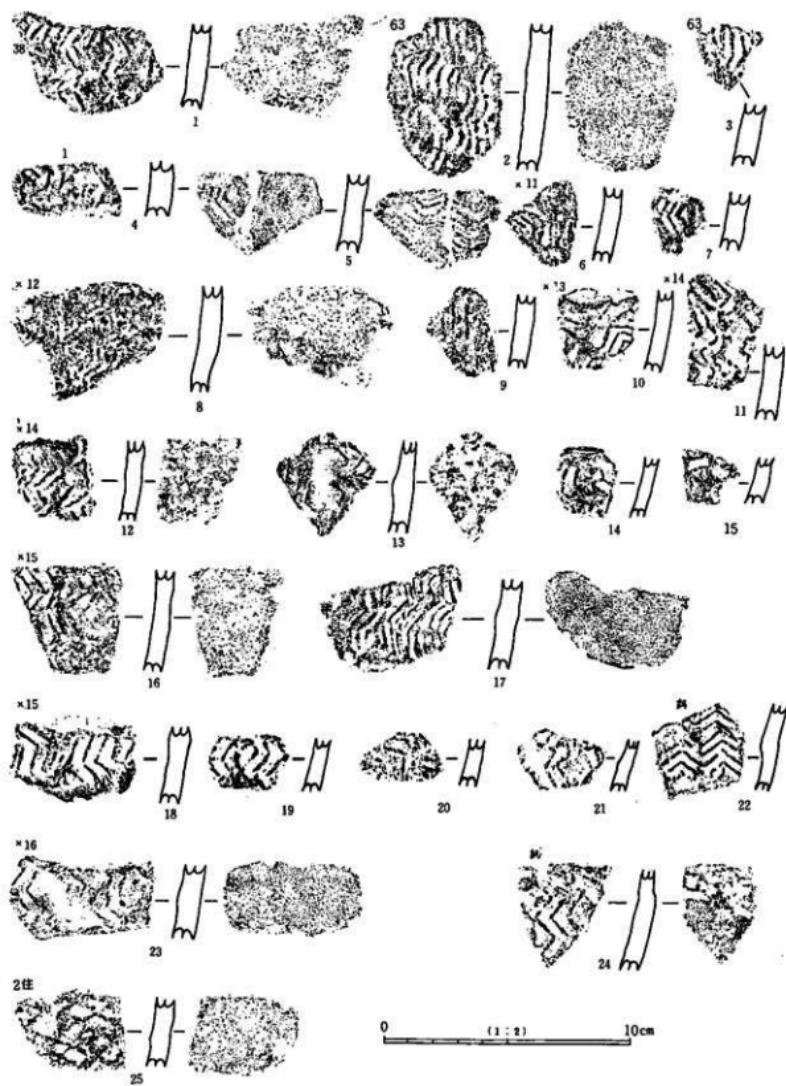
第6図 C地区南側集石炉・土焼群

0 1 2 m

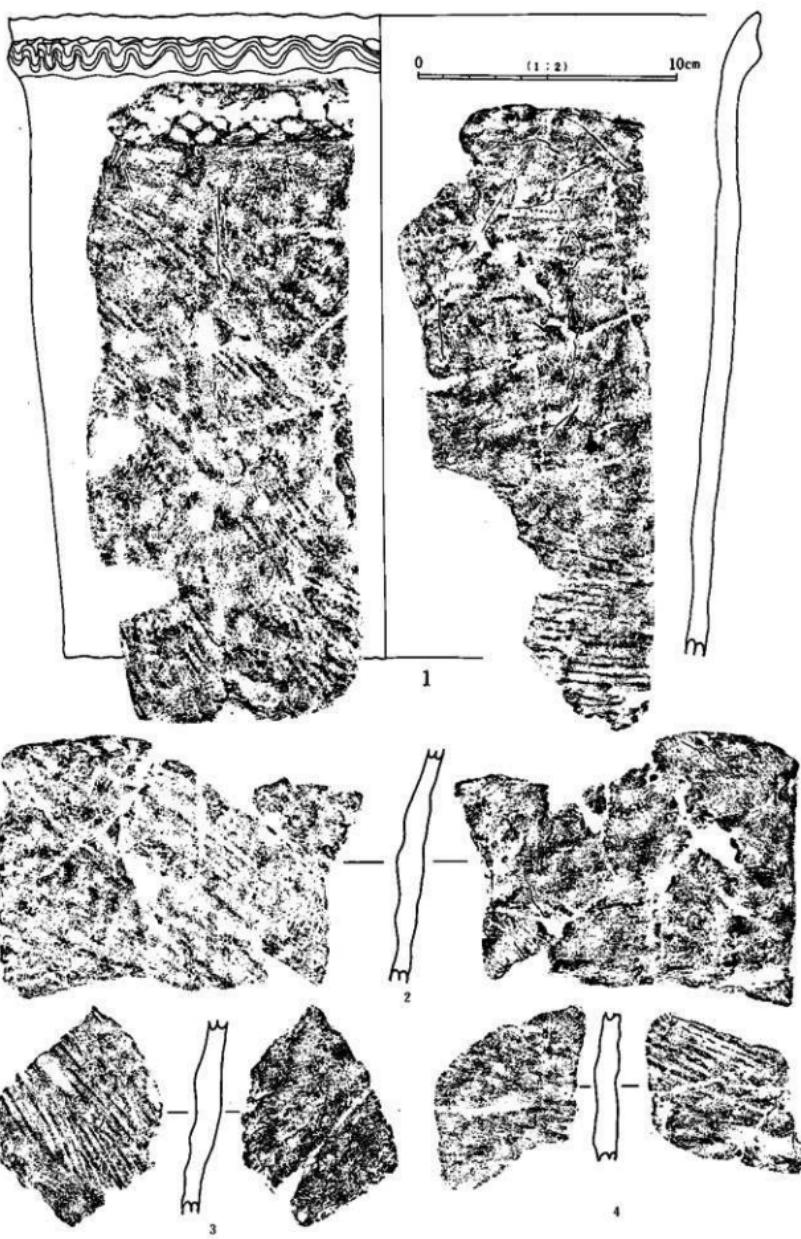




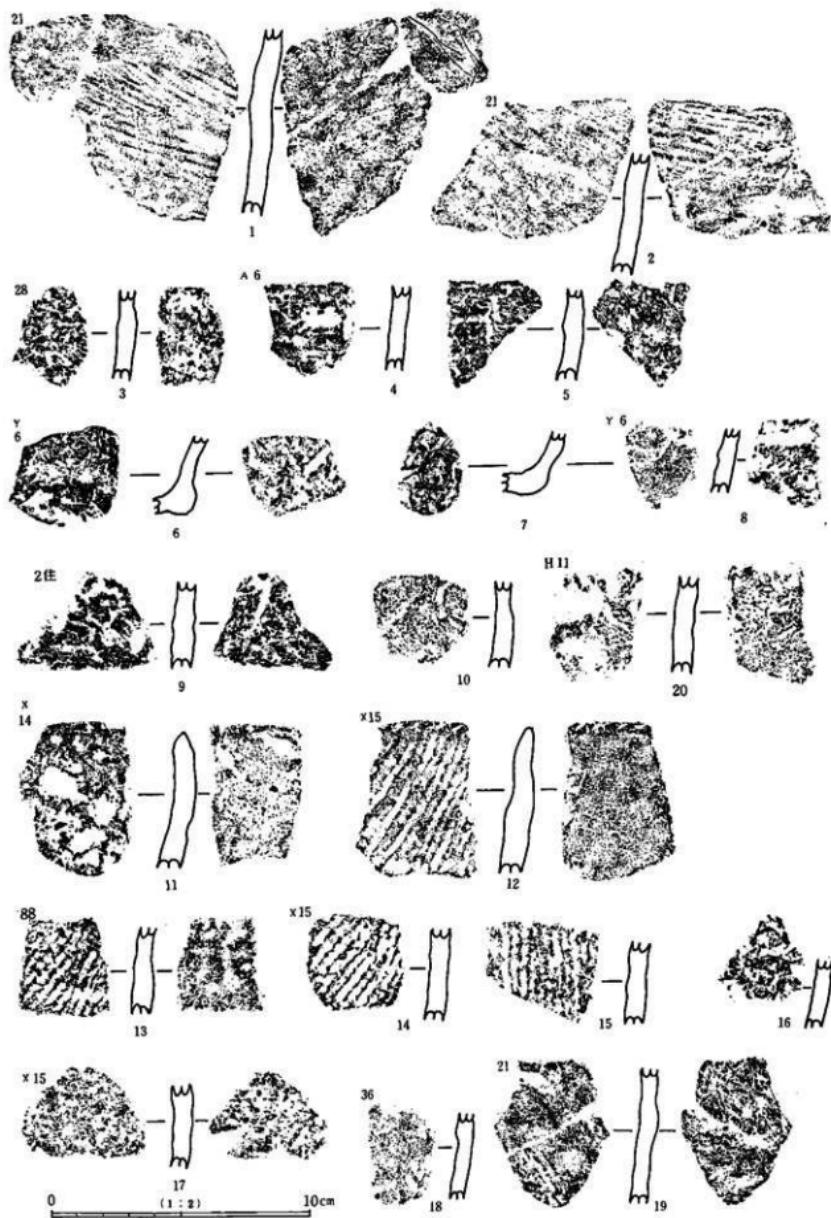
第7図 C地区集石炉 1・2・3・4・5、土壤38・45・47・48・92



第8図 C : E地区出土押型文土器



第9図 土壌21出土土器



第10図 C地区出土条痕文・せんいの入った土器

埋められていたところで、ピットというよりは窓みとみた方がよい。6個の石による石囲い炉が北西側に偏って構築されているが、南西側の石は取り除かれていたものと思う。炉内には焼土が3cmほど堆積し焼土の下面是22cmほどである。P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>の間に40cmほどの平石が置かれている。作業台に使用されたものと思われるが、ほかの数個の石は転石であろうと思われる。

遺物の出土は少なく、器形を知れる土器はP<sub>1</sub>の横にあった半個体の変形土器だけである。第12図1の土器がそれで、口径15cm・胴部最大幅16cmを測れるが、底部が欠損しているので26cm以上としか言えないが、口縁広口・胴部くの字の張り出し・縦長の変形土器で、口辺から肩までは無文、くびれた頸部から胴部下方にかけては粘土紐貼り付けを主体にして凹凸の多い文様が付けられ、手のこんだ文様・瓢形に張り出す胴部・口縁の緩やかな立ち上がり等小形ながら整った土器で、中期後葉前半の様相がみられる。その他の土器片は第12図2~11で、深めの掘り込みの沈線文様・張りつけた突窓を切り込みながら梢円状に構成するものがみられる。

石器の出土は5点だけで、第16図1は硬砂岩製の不整形の打石器、2は珪岩製の剥片石器である。第17図1~3も珪岩製の剥片石器である。

### (2) 2号住居址（第11・12・16・17図、写図12・13）

B地区南側中央辺りで検出された竪穴住居址で、主軸方向はN16°Wで、南北方向4.1m・東西方向3.2mの変形梢円状の竪穴である。C地区の上方に位置することもあって、水田造成時の削りが進み壁高は15cm内外しか残されていないので、掘り方は不明確であるが傾斜傾向がみられる。床面は炭を含む茶褐色土の堆積があったので検出は容易で、堅い平坦な床面が確認されている。ピットは9個検出されている。配列・深さから推定すると5~6本が主柱穴かと思われる。P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>またはP<sub>7</sub>・P<sub>8</sub>で、深さは48・41・42・60・51・48・32cmを測る。竪穴内を取り巻くように配列される。P<sub>9</sub>は補助柱穴、P<sub>10</sub>は上部に配石を持つことから貯蔵穴かと思われる。炉は中央や北側に偏って10個人の頭大以下の石による石囲い炉で、梢円状に横据えの角石で構成される。炉の深さは20cm程度であるが、下層には5cmほど焼土が堆積している。炉石のほかには2個の角石があったが、転石かと思われる。

土器の出土は少なく、丹塗りの痕跡が残ったみみずく形の把手（第12図14）のほかは、土器片30点ほどで、第12図15~20の土器片は、柳刃形の退化した形式のもの・突き刺し文で構成されるものがある。石器は15点ほど出土している。第16図3~14・第17図4~13のもので、第16図3~5は硬砂岩製の打石器・横刃型石器であり、6~11は珪岩製の剥離面の大きな石器で、12~14は領家系の軟質な打石器である。第17図は小形の石器で、4~9は珪岩製の石器、10は領家系のポイント状の石器、11は黒曜石製のポイント、12は黒曜石製の剥片、13は珪岩製の石器である。

2号住居址だけではないが、この遺跡全体では珪岩又は安山岩製・領家系の石器の数が多く、この住居址はとくにその傾向が目立っている。珪岩製・領家系の石器がどの時代に伴うのかは不明確であるが、この住居址の覆土中から縄文時代早期と思われる纖維を含む土器片が2点出土し、東側に接するように集石炉4や焼土を持つ土壤が検出されていて、課題解決のひとつの条件となる。

### (3) 3号住居址（第13・14・16・17図、写図13・14・15）

D地区北側で検出された竪穴住居址であるが、この地区は水田造成による削り取りが進んだところ

で、耕作土排土作業中に炉石が露呈し、床面が一部現れたほど浅かった。また試掘のトレンチにより床面下まで掘り下げが進んだところもあって、全容を確かめることができない住居址でもあった。住居址の主軸はN12°Wで、南北方向4.5m・東西方向推定3.7mの隅九方形に近い梢円形の竪穴で、上面が削平されていて壁は最高5cmくらいしか残されていない。したがって掘り形は不詳である。ピットは10個ほど検出されているが、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>が主柱穴かと思われ、深さは38・56・39・38cmを測る。P<sub>5</sub>は大きさ・深さ・土器片の出土状態から貯蔵穴、P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>・P<sub>8</sub>は補助柱穴かと思われるが、50cm以上と深いものもあるから主柱穴があるかもしれない。P<sub>9</sub>とその周辺には窓み・ピットが集合し、夥しい焼土を持つ土壤がある。伴出する土器片は少なく時期を決める材料に事欠く状況で、住居址に伴うものかどうか不詳である。(この焼土は試掘調査のおりに一部確認されている)炉は中央北側に偏って検出され、4個の角石がコの字形に残る石囲い炉である。南側と西北隅の石は取り除かれたものと思われるが、6～7個の石があつて推定される。焼土は5cmほど下に多く堆積し南側炉の前も非常に焼けた床面が検出されている。

土器は上半分が削平時に削り取られた壺形土器(第14図1)が炉の南側中央付近から出土し、その南側から壺形土器口縁・底部(第14図2・3)が発見されている。1の土器は口径14.2cm・器高21.8cm・洞部最大幅14cmあって、口辺は無文で緩やかな立ち上がりで、頸部から底部近くまで粘土紐張りつけ・連続突き刺し文で構成される土器で、器形・文様は1号住居址の壺形土器に類似している。2は張り付け文を持つ口縁、4～9の土器片はくの字形口縁・緩やかな内湾形口縁・緩やかな外反形口縁等があり、施文は深めの沈線・竹管文・櫛刃形がみられる。傾向としては1号住居址の土器に類似していく、中期後葉前半の土器かと思われる。

石器は9点ほど出土している。第16図15・16は硬砂岩製の打石器、17・18は珪岩製の剥片石器、19～21は領家系の打石器で、19は剥離面の大きな薄手の特殊な石器である。第17図の小形石器は重複して記載されている。

#### (4) 4号住居址(第13・14・16・17、写図16・17)

B地区最南端で検出された竪穴住居址で、主軸方向はN15°Wで竪穴のプランは南北方向4.2m・東西方向3.9mのほぼ円形に近い住居址である。壁高は35～40cmほどあって、掘り方は傾斜がきつく直に近いところもある。床面は堅く平坦で良好な床面が検出されている。ピットは浅いもの・深いものがあり12個検出されているが、配置的にみて深いものを上げるとP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>がそれぞれ深さは49・47・41・42・50・58cmあって、この5～6個が主柱穴かと思われるが、P<sub>7</sub>とP<sub>8</sub>の間にもう1個あると配列が整うと思い検出を試みたが、発見されていない。南西側にP<sub>9</sub>・P<sub>10</sub>・P<sub>11</sub>・P<sub>12</sub>の浅めのピットが集合している。整った配置ではないが入口部に關係するものかとも思われる。P<sub>13</sub>の両側には30cmほどの平石が配置されている。この住居址の時期からみて埋甕の所在が想定されたが発見することはできなかった。竪穴の中央北側に偏って、5個の石で構築された石囲い炉が検出されている。北側のコの字形三方は長さ50cmほどの一枚石が縦に埋められ、南側は2個の石が並べられている。石の深さは30cm以上あり、底まで焼土が検出された。炉の東西の長さは85cmほどある雄大な炉である。

器形の知れる土器の発見はなかったが、覆土から下層までには50点ほどの土器片が出土したが、床面近くからの遺物出土は少ない。第14図13～22の土器は渦巻文・太目の沈線等で構成されるもので、

中期後葉の土器が大部分である。

石器は20点ほど発見されている。第26図の22～24は硬砂岩製の打石器・横刃形石器で、第17図20～27図は小形石器である。20は蛋白石製、21は珪岩製の石器で、22は小形丸石、23は石英製のスクレイバー状石器、24・25は黒曜石製の石鎌、26・27は黒曜石の剥片石器で、他の住居址に比べると小形石器が多く、黒曜石製のものが多くみられる。

#### (5) 5号住居址（第13・15・18図、写図18・19）

調査地最下段E地区南側で検出された竪穴住居址で、半分石の残った石囲い炉と地床炉のような炉が2か所検出されているので、立て替えによるものか別の住居が重複しているのかはっきりしない。石囲いのある炉を主体にすると、主軸方向はほぼ北であり、地床炉を主体にすると東へ45°ほどずれることになる。住居のプランは南北6.5m・東西は東側の土堤で切られているのではっきりしないが、5m以上ある大形な住居に思えるが、総的には不整形の椭円状である。西側の壁をみると括れたところもあることから、2基の住居の重複があるようにも思えるが、決め手を欠く竪穴である。壁高は北側では25cm、南側では40cm・西側中央付近では55cmと違いが大きい。検出当初土器が出ながら輪郭が確かめられないまま掘り下げ、その後南側を拡張したためにその違いが生じている。竪穴の掘り方は傾斜がきつく、ところによっては直に近いところもある。ピットは12個検出されている。配列が不規則なところもあるので配列と深さで追ってみると、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>が支柱穴候補と考えられる。しかし、深さをみると29・31・51・58・67・26・31・34・42cmとばらつきが多く、住居の形態をまとめにくい配列である。中央部北側に南側だけ縁石を残した石囲い炉が検出されている。丸石利用の炉で、15cmほど下から多くの焼土が検出されている。炉の西側には広めで深めの窪みがあり、土器片の出土も多く、焼土が堆積する部分がある。その用途は不詳である。東側には土堤で一部切られた20cmほどの窪みがあって、焼土が堆積し炉のように思えるがはっきりしない。

器形を知ることのできる土器は発見されていないが、土器片は80点ほど出土している。第15図の土器片は5号住居址の覆土・床面近くから出土したもので、粘土紐張りつけ文・押圧突帯に突き刺し文の付くもの・竹管文・櫛刃形文・唐草文等さまざまな土器がみられる。このことからみても、2時期にわたるようと思われる所以、住居形態の違った様相と合わせ考えて、時期の異なった住居址が重複しているように思われる。

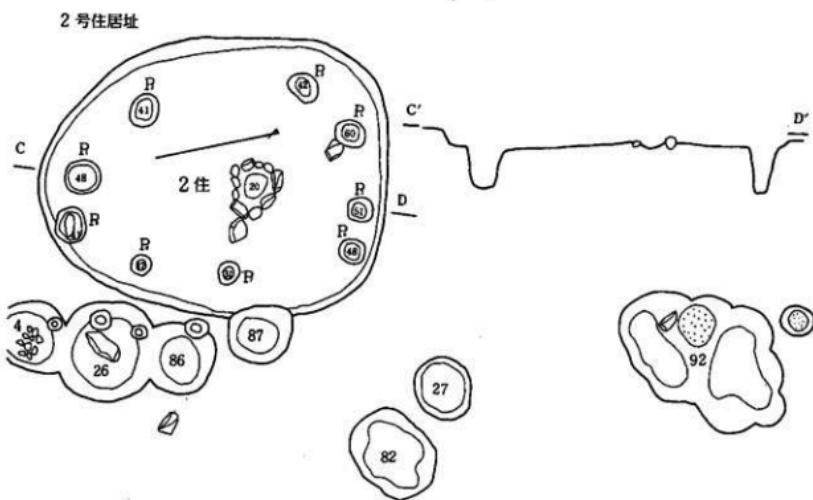
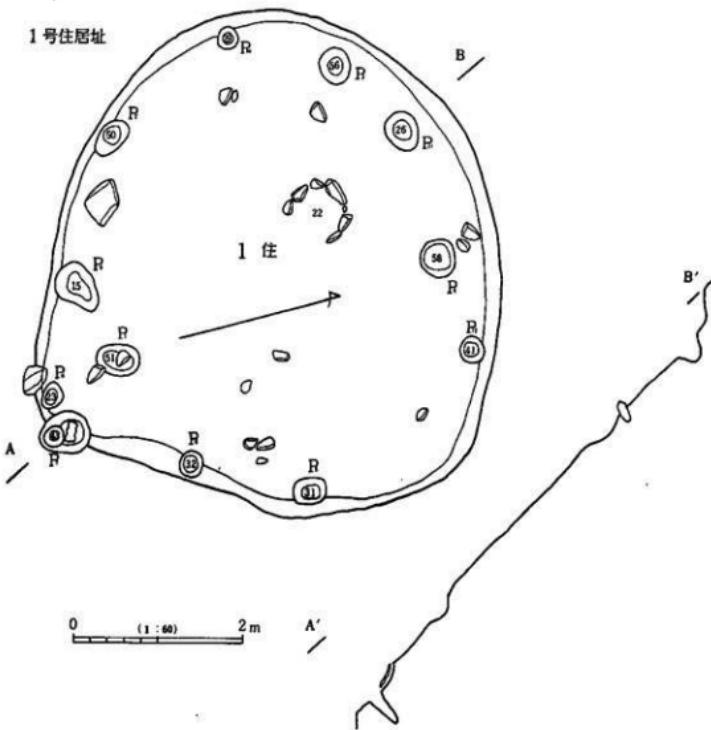
石器は第18図にあるように、小形石器は1点だけで、大形なものに限られている。第18図1・3～6は硬砂岩製の打石器・横刃形石器で、2は緑色片岩製の石器である。7・8・9は珪岩製の剥離面の大きな石器、10～16は領家系の石器である。小形石器は17・18だけで、17は緑色片岩、18は珪岩製のものである。19・20ははんれい岩状の石材で、大きな剥離面のある石核状の石である。

#### 7. 繩文時代中期方形配列土壙群（第19・20図、写図20・21）

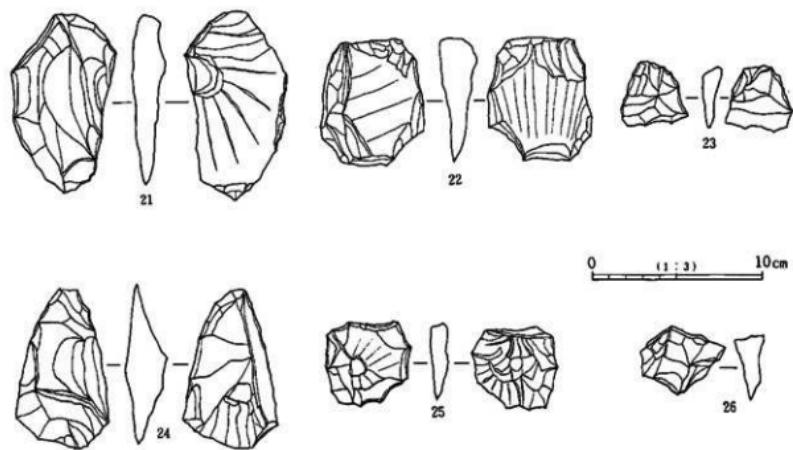
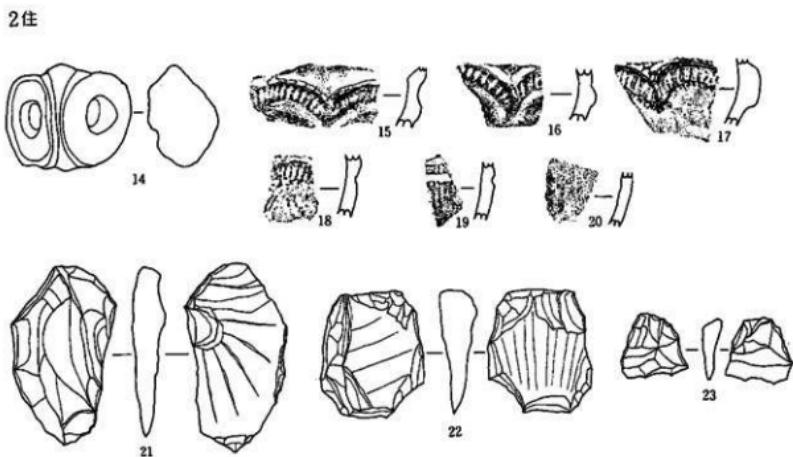
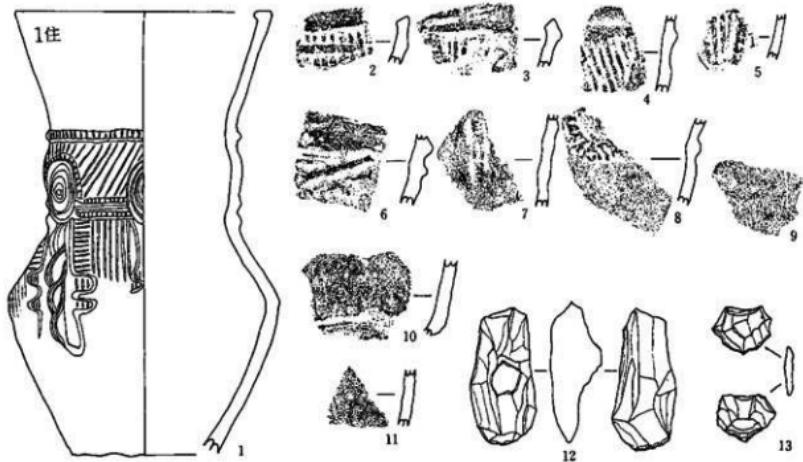
A地区の1号住居址の北側に、大きな土壙8基によって方形区画が構成される土壙群が検出されている。「方形配列土壙」とか「方形柱列」とか呼ばれる一連の土壙群である。その構成の主体となる土壙は、南西側から土壙1・5・2・8・3・10の6基で、南西側の中間に土壙4と北東側の土壙11を含めると8基の土壙で構成される遺構である。土壙4から土壙11までの間隔は9.4m・東西の

表2 「方形配列土壙群」土壤一覧

NO	長 径	短 径	深 さ	形 態	焼 土・炭	土 器	石 器	備 考
1	1.4m	1.25m	1.1m		中層に炭	中期 1 1		
2	1.45	1.64	1.1		上・中層に炭 底に焼土・石	1 5	黒曜石 1	
3	1.9	1.45	1.23		中層から炭	4 0	横刃 1 ・ 硅 1	
5	1.65	1.60	1.02		中層に炭 上層に石・土器	4 0	領 1	
8	2.05	1.70	1.18		上層・中層焼土 中層に甕一個体	5 0	打石 1 ・ クレーパー 1	
10	1.80	1.50	1.13		中層に炭 下層に焼土	1 4		
4	0.50	0.50	0.55			1 0	剥石 1	
11	0.70	0.68	0.61			1 3		
6	0.30	0.26	0.40					
7	0.37	0.18	0.35					
9	0.60	0.32	0.38			1		

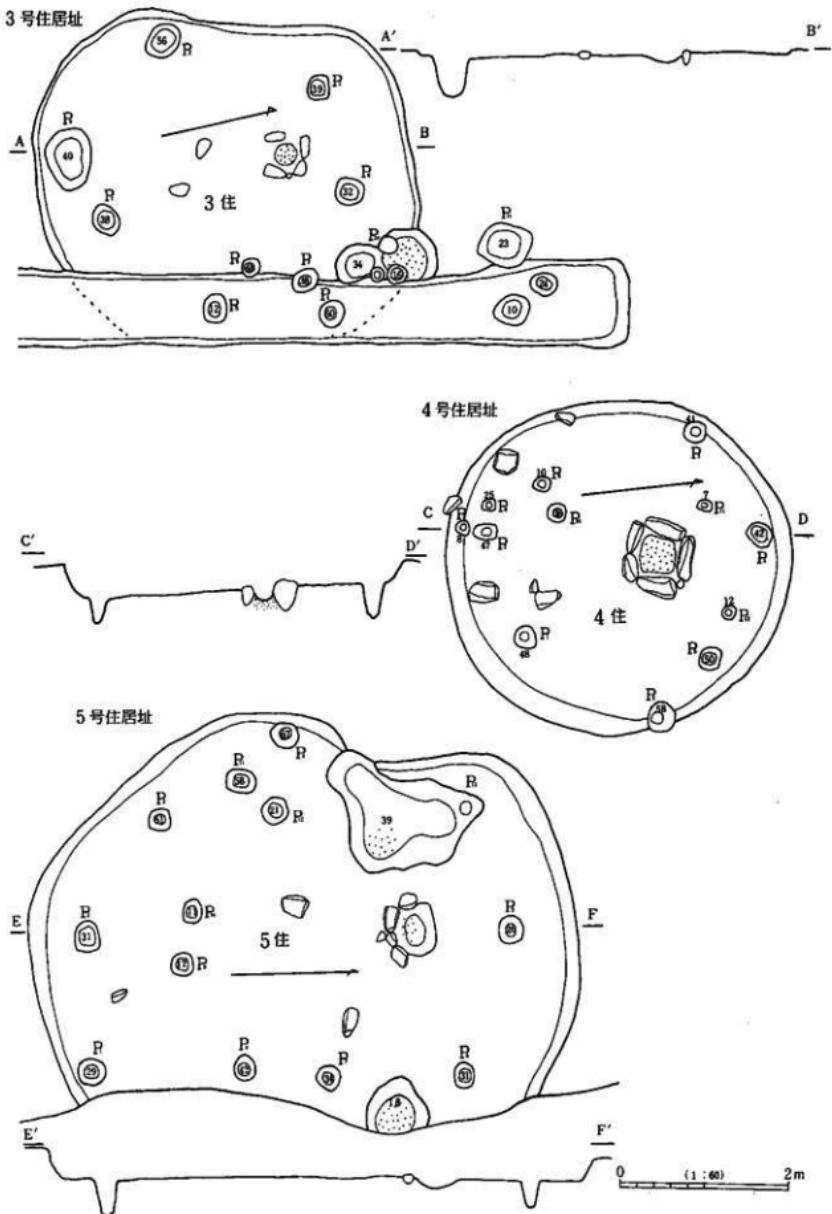


第11図 1・2号住居址

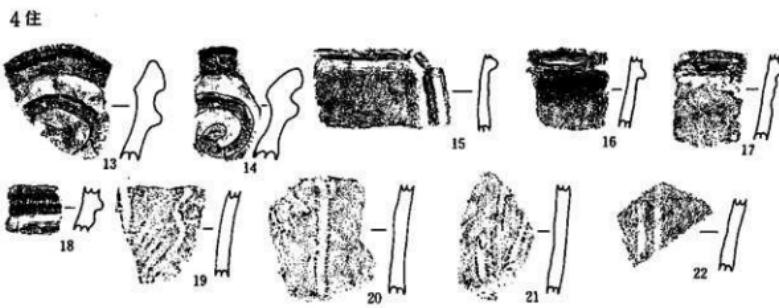
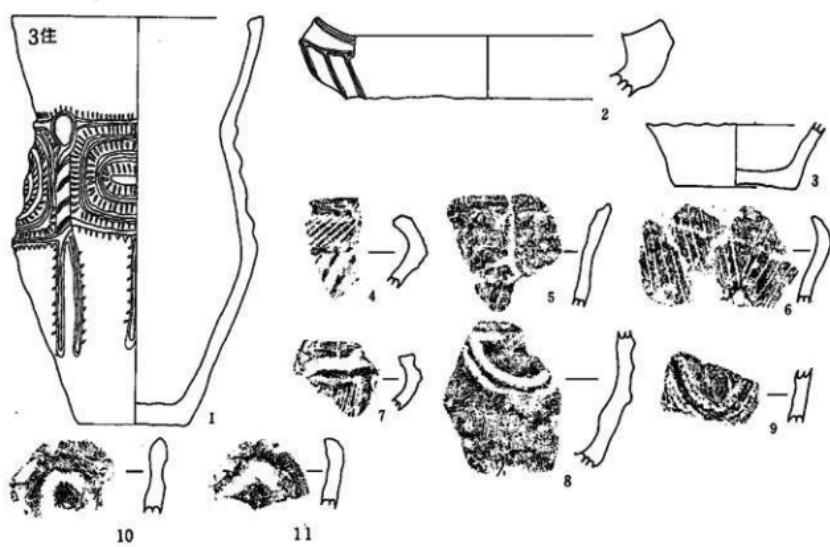


0 (1 : 3) 10cm

第12図 1・2号住居址出土土器・石器



第13図 3・4・5号住居址

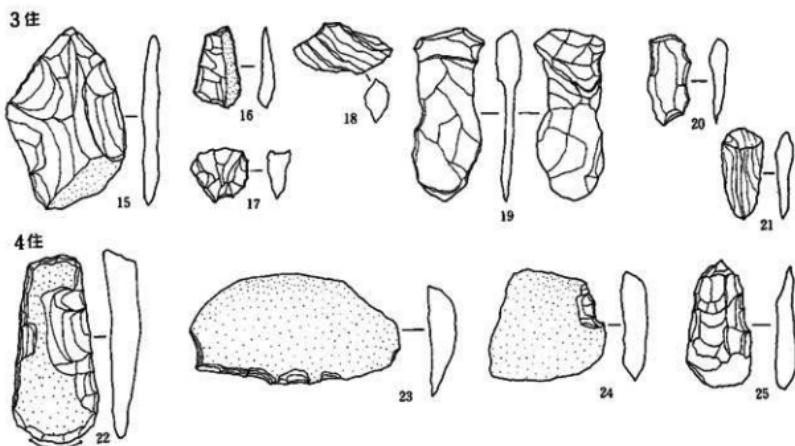
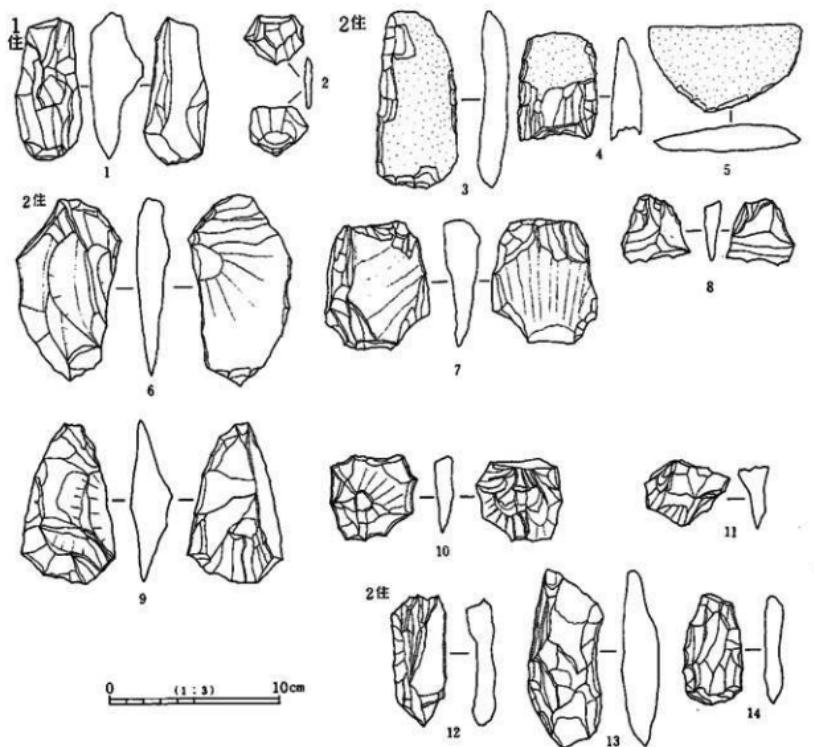


0 (1 : 3) 10 cm

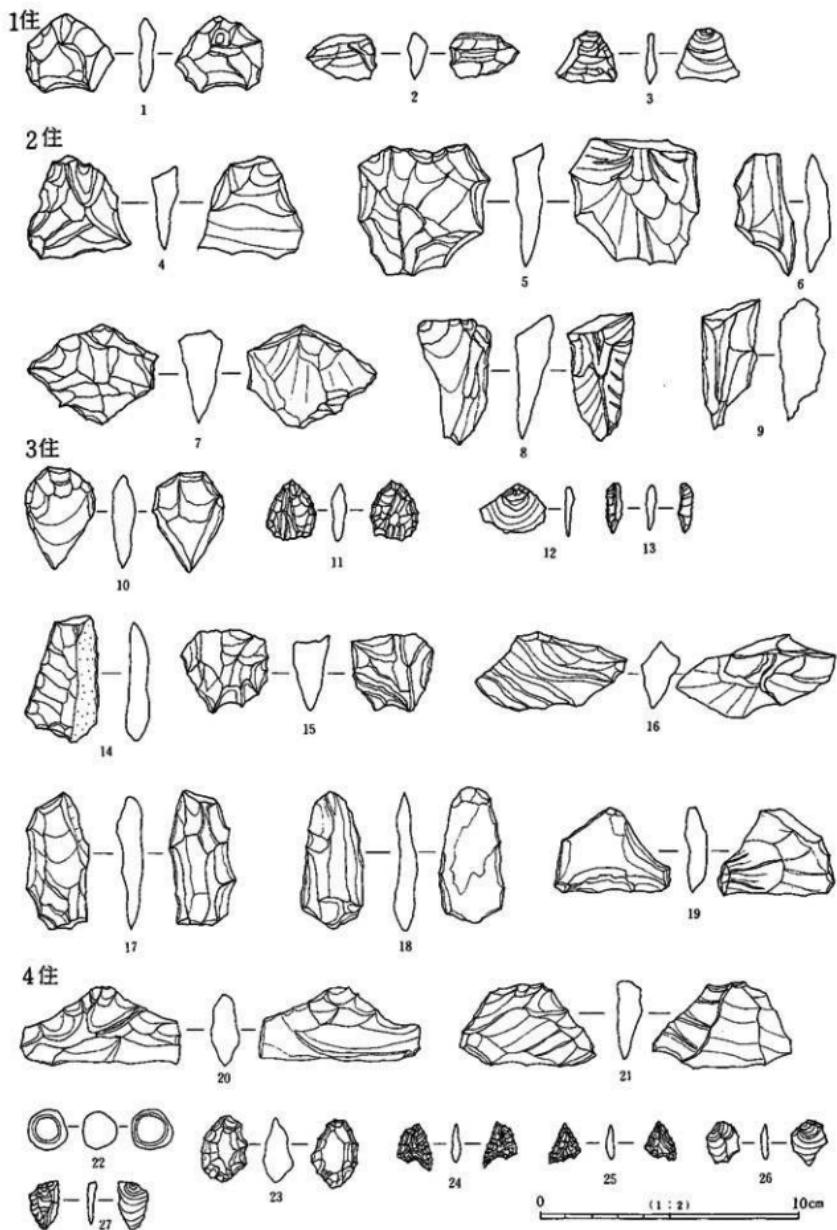
第14図 3・4号住居址出土土器



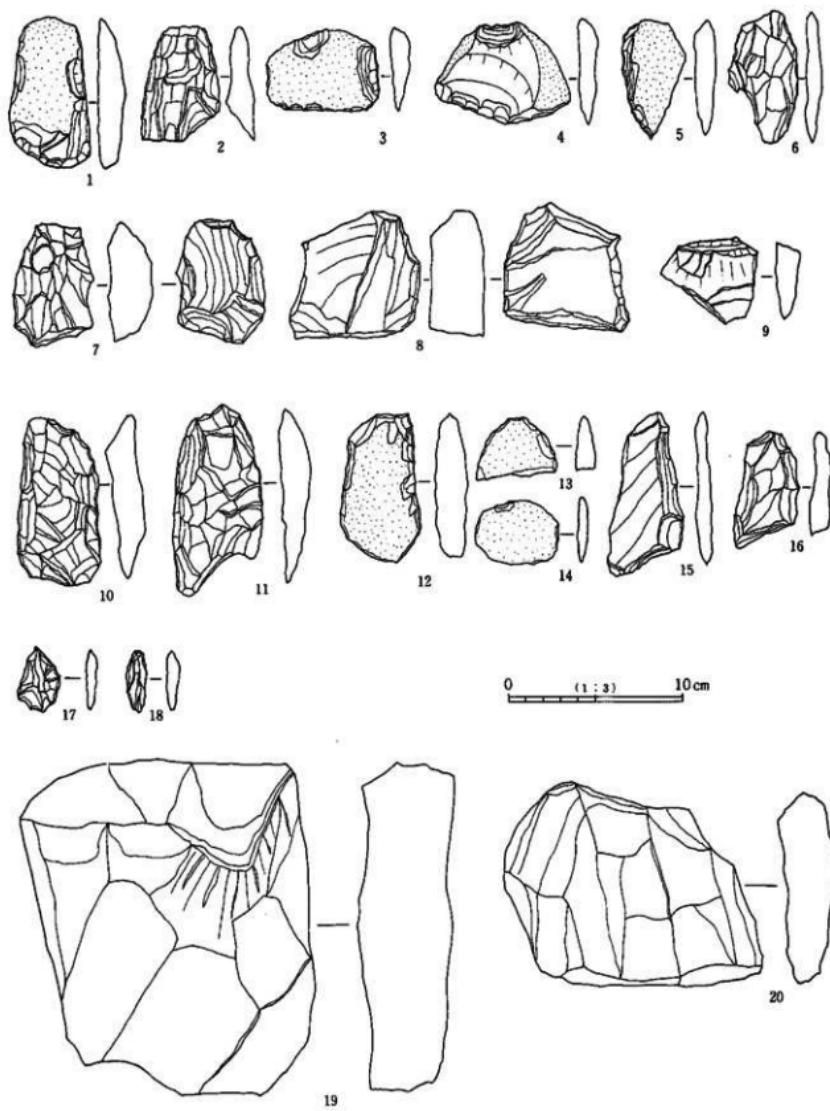
第15図 5号住居址出土土器



第16図 1～4号住居址出土石器(1)



第17図 1～4号住居址出土石器(2)



第18図 5号住居址出土石器

表3 阿智村カヤ原遺跡土壤一覧

●印石器・○図版にあり

N O	早 期	前 期	中 期	形 状・特 徴 等 (深さ)	石 起	石 錠	硅 酸 石	打 石 器	黑 刮 石	は か	備 考
A 1				1 1 筒形 深い							
2				1 5 底に配石・焼土						黒1	
3				4 0 上層に石			1	● 1			
4				1 0						1	
5				4 0					領●2		
6											
7											
8				5 0 半完形2 焼土・炭多				● 1	1		
9				1							
1 0				1 4 底二重構造							
1 1				1 3			● 1				
1 2				1							
B 1 3				2 上層に石			1				
1 4											
C 1 5	1	1 0		ピットを持つ			蛋白1	●			
1 6				底に焼土 (49cm)							
1 7											
1 8											
1 9				2 焼土がある (26cm)			● 1	● 1			
2 0				炭多い (43cm)						凹石 ●	
2 1	疊 1			(表裏条痕半完形)			● 1	● 1			
2 2							● 1				
2 3											
2 4									2		
2 5											
2 6				2 (炭多い) (40cm)							
2 7											
2 8	1		1					● 2		凹石 ●	
2 9			6	焼土 (40cm)		1					
3 0											
3 2											
3 3					(45cm)						
3 4											
3 5			1								
3 6	2	1	1								
3 7											
3 8	2	3			(50cm)						
C 3 9											
4 0					1 (45cm)						
4 1	2										
4 2					(60cm)						
4 3											

NO	早 期	前 期	中 期	形 状・特 徴 等 (深さ)	石 跡	石 磨	珪 利 石	打 石 器	黒 利 石	ほか	備 考
4 4				5							
4 5		1	1	炭多 (90cm)							
4 6											
4 7				4							
4 8	1		1	上層に配石・焼土 (40cm)	● 1		● 2	1			
4 9						(49)					
5 0			4							3	
5 1											
5 2											
8 1	2		8	円板1 配石あり							
8 2						(40cm)					
8 3											
8 4											
8 5			4								
8 6			4				● 4		3		
8 7											
8 8	2	1		炭多 (45cm)		1	2		2		
8 9				1							
9 0	1		3								
9 2				焼土 (63cm)							
E 5 3			1								
5 4											
5 5											
5 6			8								
5 7			4						横 1		
5 8											
5 9											
6 0			4	貼りつけ							
6 1	1		2			(54cm)	● 1				
6 2											
6 3	4		1			(45cm)					
6 4											
6 5			8	炭多い							
E 6 6											
6 7			10	筒形 石あり (77cm)				● 2			
6 8											
6 9				筒形で深い ピット(58cm)							
7 0			2					1	1		
7 1			1			(71cm)					
7 2			1	筒形で深い		(54cm)					
7 3											
7 4			14	中期中葉		(55cm)		●領1			
7 5			2					● 2			
7 6						(56cm)					
7 7											

NO	早 期	前 期	中 期	形 状・特 徴 等 (深さ)	石 匙	石 錠	刮 刮 石	打 石 器	黑 刺 石	ほ か	備 考
7 8			2	後期7(網代底)			● 1			1	
7 9			3								
8 0			5		(49cm)						
9 3		1									
C 9 2				焼土あり							

早期・前期・後期出土のグリット

C X11	3		1 0					1			
X12	2			7 後期1							
X13	1										
X14	5	1									
X15	6	1 2									
Y11			2	後期1							
Y16	1										
A 6	2		2								
A 8	1		8					1			
B 4				後期1							
B C 4	1		4								
Y 6	3										
E R12		1	3								
R14				後期3							
S13			3	後期7							

幅は4.4mに及ぶ。それぞれの土壙の規模は表2のようで、中に並ぶ1・2・3と5・8・10の6基は、長径・短径とも1m以上2mを越えるものもある。深さもみな1mを越える大きな土壙である。南と北の中間にあらる4・11はやや小さく、深さも50~60cmである。掘り形態は総じて筒形のものが多いが、3・8・10は二段構造である。焼土のある土壙は2・8・10で最も量が多いのは土壙8で、上層・中層・下層にかけて何回にも火が使われた形跡がある。土器の出土が多かったのは2・3・5・8で、顕著なのはやはり土壙8である。土壙8を主体にして、第19図の土層図により土壙の形態を観察すると、上層から焼土が検出される。この焼土はさらに下層にも続き、この焼土と炭を含む黒色土の中から多くの土器片が出土している。その下層には配石がありこの石の下にまた焼土塊が堆積している。この炭塊・焼土塊・土器群・配石の含まれる1~6の層は、土壙内を二次的に掘り込んだ形跡が観察される。これと同じような状態は土壙2・3・5・10でも観察される。このことから推測できることは、まず最初に大きな土壙を掘り、意図的に埋めたか自然に埋まった後に、もう一度土壙を掘って配石したり・火を使用したり・土器を埋めたりしたように思える。そうなると、柱列と考えるよりは、ある目的で構築した土壙群とするのが妥当のように思われる。

この土壙群から出土した主たる土器は、第20図にある。1~3は土壙1、4~7は土壙2、8~11は土壙3、12は底部で土壙4、13は土壙5、14~17は土壙8、18~21は土壙10、23~25は土壙11から出土してある。とくに、土壙8では土器の底部は2個体分あり、ある程度の個体の土器が埋められていることが分る。これらの土器はどの土器・土器片も二次的に焼かれたもので、表面が焼けただれたものが出土している。時期的にはどの土壙の土器も中期後葉のもので、類似のものは4号住居址・5号住居址の一部で発見されている。

石器は全部で7点出土している。第22図1~5がそれである。1・2は土壙3出土の硬砂岩製の打石斧・硅岩製石器、3・4は土壙5の領家系の石器、8は土壙8出土の硬砂岩製のものである。

## 8. 繩文時代中期以降の土壙

調査地全体では登録した土壙は92基である。(第3図参照) A地区では方形配列土壙群を含めて12基、B地区は2基、C地区では49基、D・E地区では29基である。全体は表3の土壙一覧表により概観することにして、特徴のある土壙について触ることにする。

### (1) A地区的土壙

方形配列土壙群で触れたように、方形に取り巻く8基の土壙のほかにその区画内に3基の土壙(6・7・9)とやや離れた南側に土壙12がある。

### (2) B地区的土壙

B地区は水田造成の作業で削り取られたところで遺構の検出が少なく、4号住居址のほかは4基の土壙だけが検出されている。(表3では2基) 遺物もほとんど出土していない。

### (3) C地区的土壙群(第3・5・6・21~25図)

49基ほどの土壙でこの中で早期か・前期かと思われる7基ほどを除くと、40基ほどの土壙が中期か

と思われるがはっきりしない。表3により中期の土器片が5点以上出土したものは、土壌29・44・81に留まる。深く掘り込まれた土壌（深さ40cm以上）は、土壌16・20・26・29・32・38・40・42・45・48・49・82・87・92で、炭の包含があったり、焼土を持つものは土壌16・19・20・26・29・42・45・87・92で、これらの土壌は19・82をのぞいて皆深めの土壌である。焼土や炭の多い土壌は、ところを違えて集中する傾向がある。第2号住居址の東側から南にかけた一帯（4列から8列）・11列付近・北側一帯（17列・18列）の3地帯に分けることができる。複数の石による配石を伴う土壌は2基だけで、最南端の土壌81と北側の土壌48である。

表3で一覧にしたように遺物の出土は少なめである。第21図1～11は主な遺物で、中期のものが多い。石器は第22図1～27・第23図1～15までで、早期の土壌と同様に硬砂岩製・珪岩製・領家系の石器が混在している。E地区に比べると石器の出土は多く、土壌86・87に多い。

#### （4）D・E地区の土壌群（第3・21～25図）

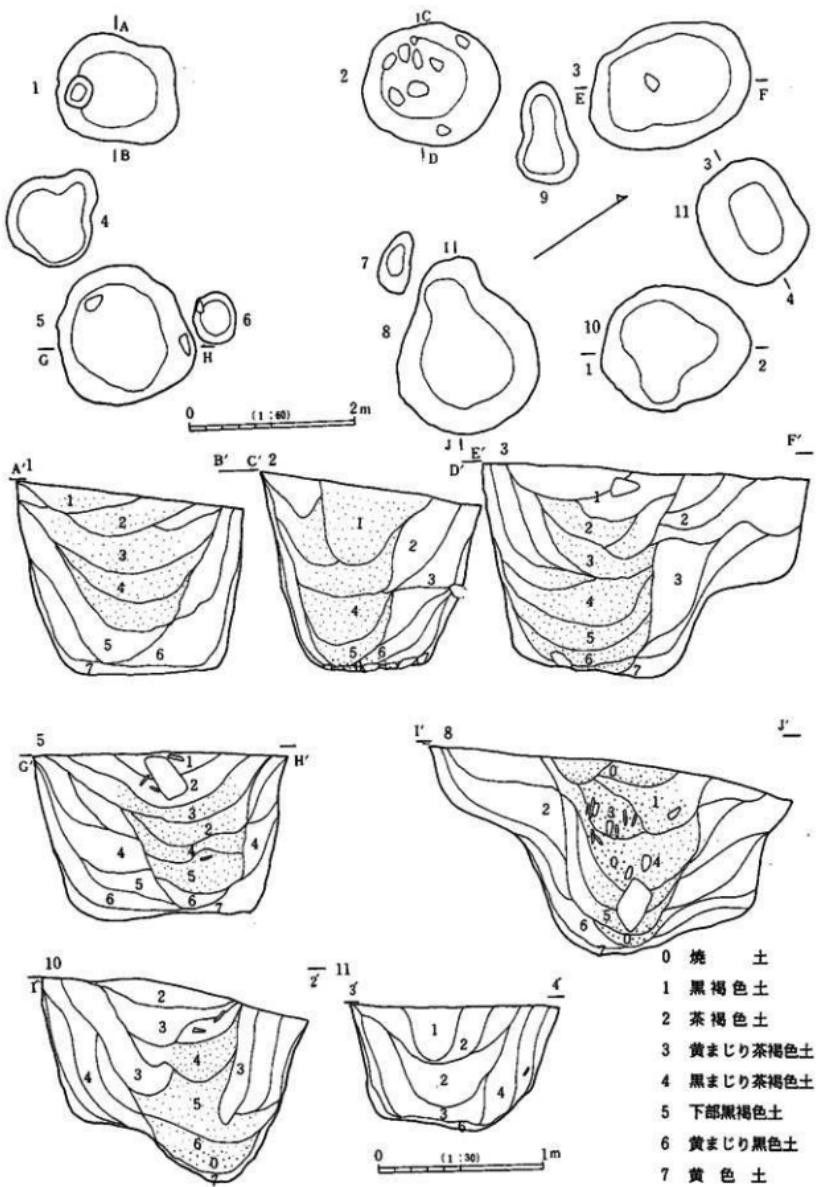
表3ではD・E地区をまとめてある。合わせると29基の土壌が登録されている。この中で縄文時代早期の土器が出土したのは土壌61・63で、土壌78からは縄文時代後期の土器（第21図29・30）が出土し、そのほかは中期のものと思われる。土器片が5点以上出土した土壌は56・65・67・74・80で、掘り形の深い土壌は、53・56・61・63・67・69・71・72・74・76・80で、C地区に比べると土壌は深めである。形態では筒形で深いものは土壌67・69・71で、それぞれ深さは77・58・54cmある。焼土や炭を伴うものは少なく、土壌65には炭が非常に多かったがほかには目立つものが少ない。土器片の出土はC地区に比べると多めであるが、石器の出土は少なかった。

### 9. その他の遺構（第3図）

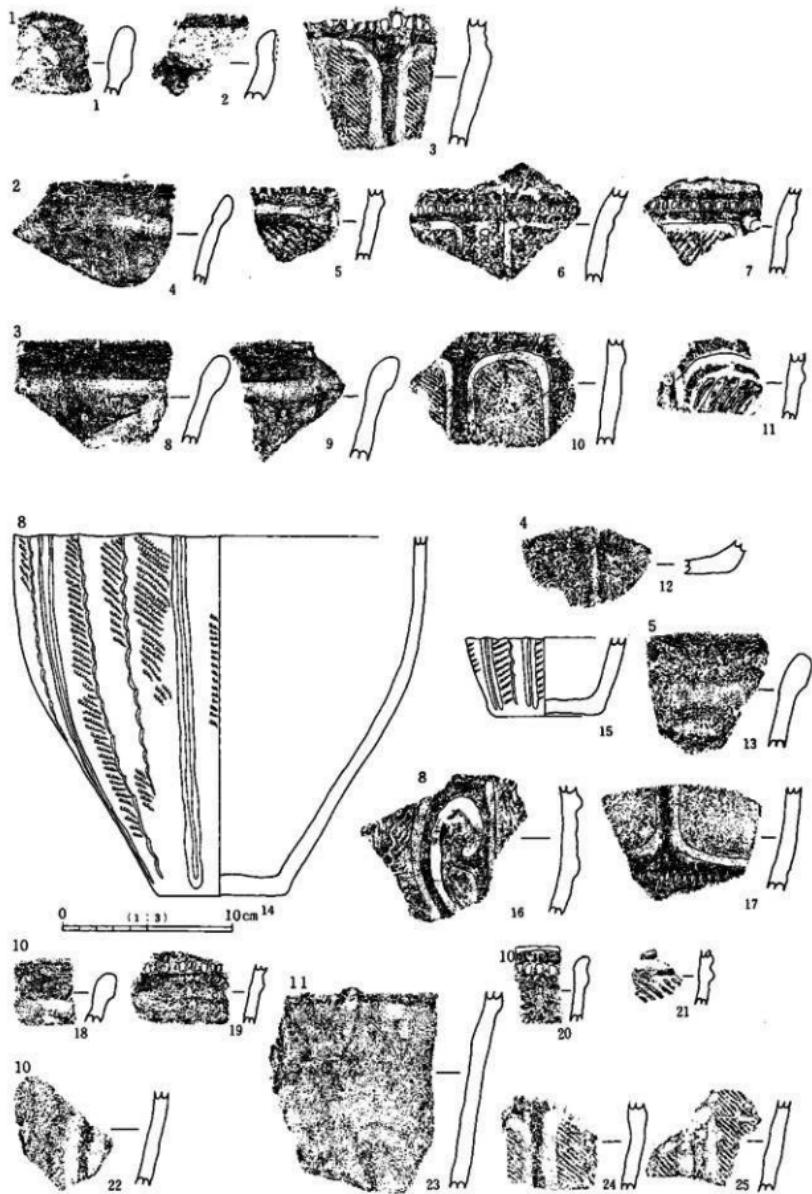
B地区南側、第4号住居址の北側に方形に掘り込まれた竪穴が検出されている。伴出される遺物はなかったが、後世に掘られたものと思われる。B地区的西側からD地区の北側にかけて溝跡が検出されている。いくらか縄文時代中期の土器片・石器が発見されているが、この上面にも流路があったので、開田頃の水路かと思われる。

### 10. 遺構以外出土の遺物（第24・25図）

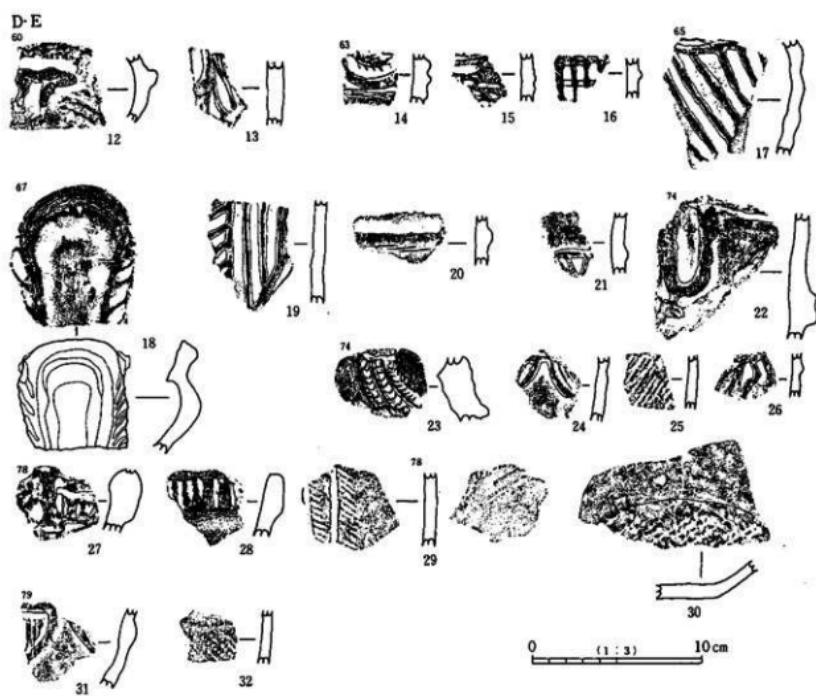
第24・25図の遺物は縄文時代早期・前期と思われるものを除いた主な土器片・石器である。地区別にみると、A地区では1号住居址・方形配列土壌群にかかる遺物のほかは、ほとんど発見されていない。C・E地区からの出土が多いが、とくにEでは大型な土器片が上面から発見されている。図には示していないが、E地区から平安時代灰釉陶器片が2片出土していることに注意が必要である。



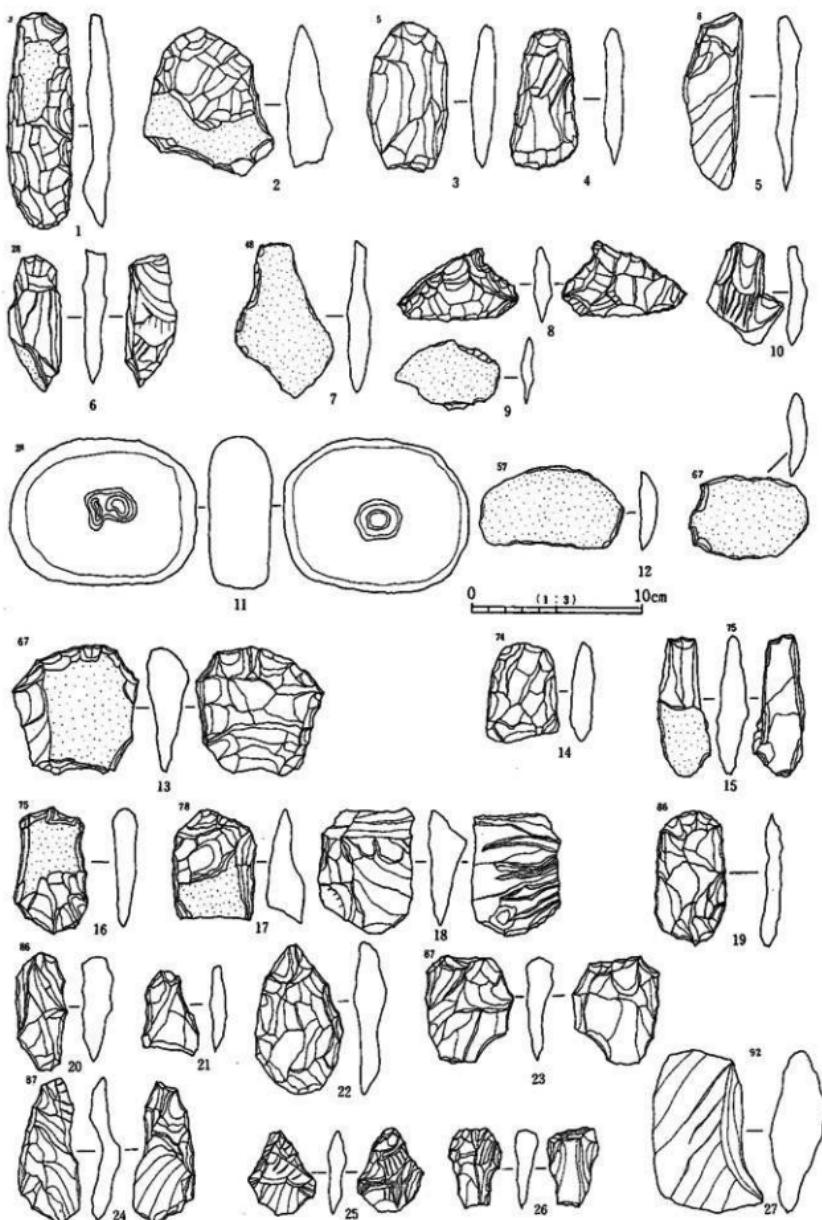
第19図 A地区方形配列土壤群



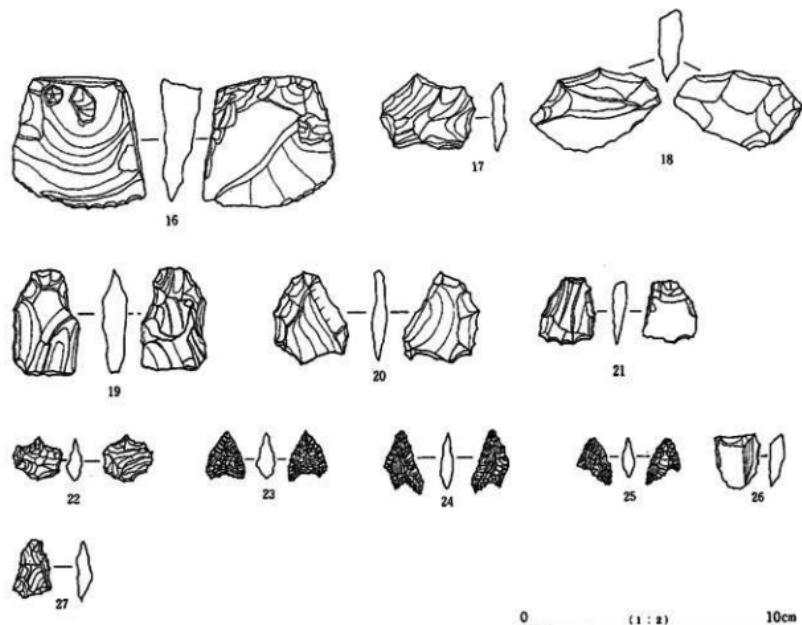
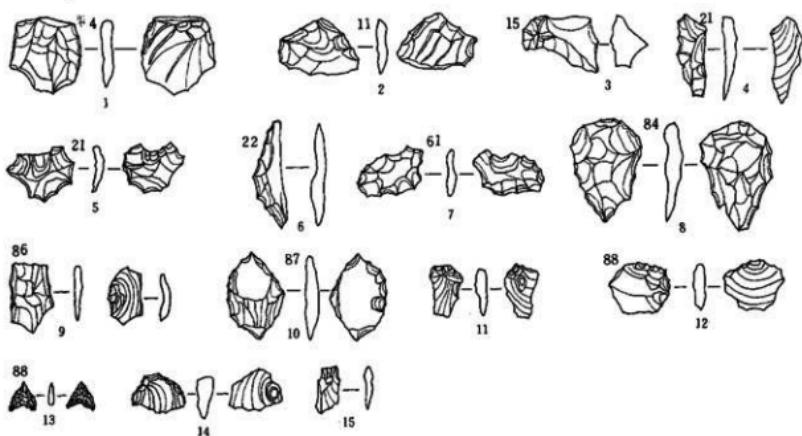
第20図 方形配列土壤群出土土器



第21図 C・E地区土壤出土土器

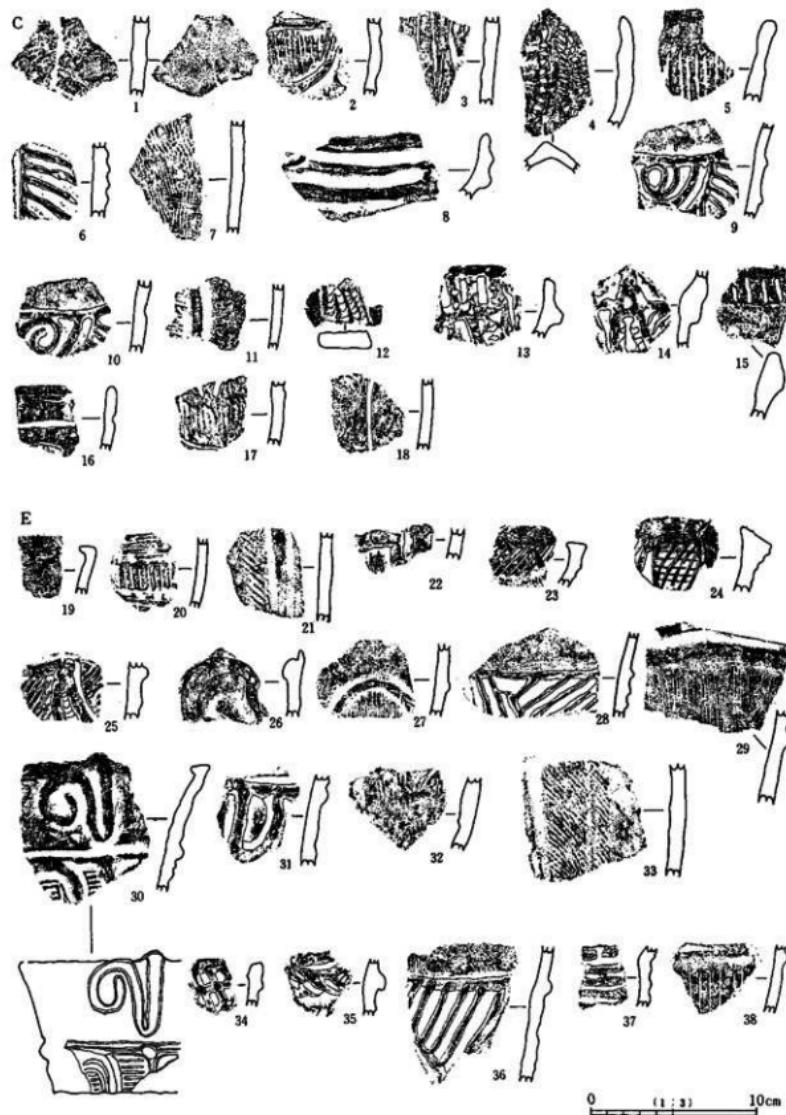


第22図 A・C・E地区土壤出土石器

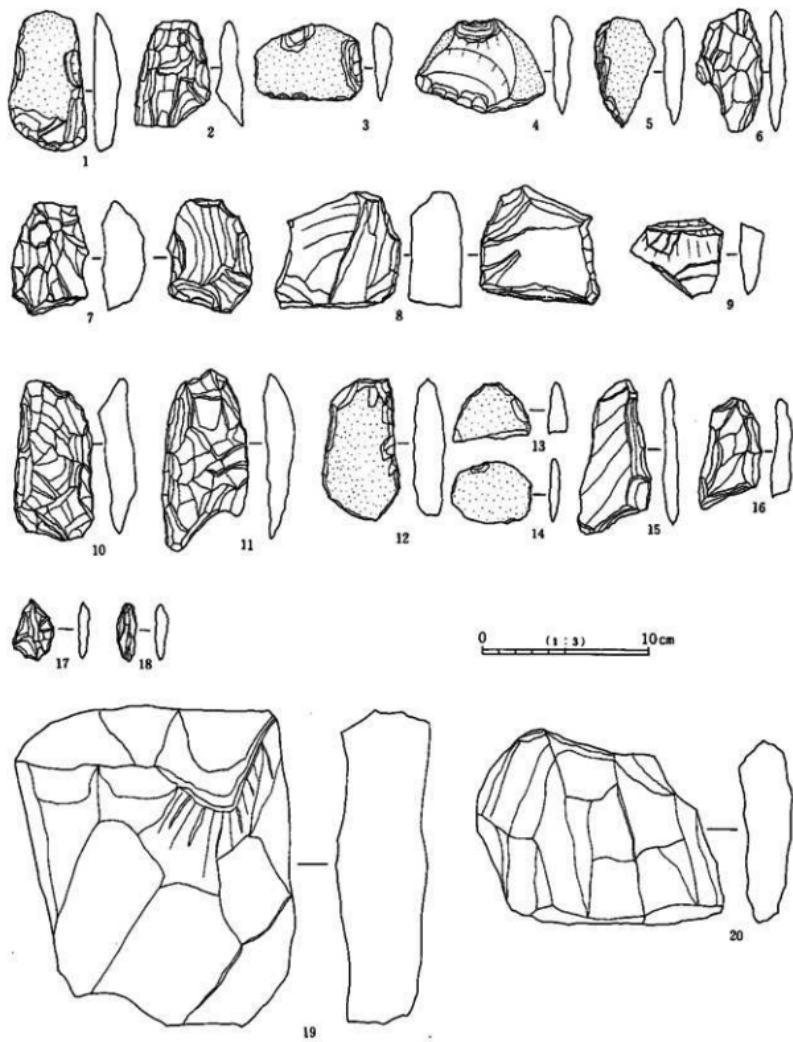


0 (1 : 2) 10cm

第23図 C + E 地区土壤出土石器



第24図 C・E地区グリット出土土器



第25図 C・E地区グリット出土石器

## IV. 調査結果のまとめ

### 1. 繩文時代早期の遺構・遺物

伍和地区には埋蔵文化財包蔵地34と古墳2基が登録されている。表1の阿智村遺跡一覧表でも分るように、從来は繩文時代中期・後期に限られていた。(但し青見平で旧石器のポイントと繩文時代前期の遺物が発見されていたが登録漏れ) 今回の発掘調査により繩文時代早期の押型文土器・表裏縄文土器片がやく40点発見され、早期かと思われる集石炉が検出されたことは伍和地区では初めてのことである。阿智村全体でも繩文時代早期以前の遺物が確認されている遺跡は、春日中原・駒場おち・小野川平林・中平北沢・大野向山・横川浪人松遺跡の6遺跡に留まり、遺構が検出されたのは今回のカヤハラ遺跡が最初である。

カヤハラ遺跡では、形態的には前期かもしれないと思われる集石炉が5基検出され、押型文土器片を伴出した土壙が6基、条痕文または纖維の入った土器片を伴出した土壙は5基ある。とくに表裏条痕文の壘形土器(半完形)の出土した土壙21は特筆される土壙である。これらの土壙の全部が早期のものとは言い切れないが、これらの土壙周辺には早期の土器片集中地があり、焼土や炭塊の多い土壙や集石炉の近くにあることから、有力な早期の土壙があると思われる。いずれにしても、標高755mの高台であるから、繩文時代早期の遺構・遺物が発見されても不思議ではないが、このような小台地は伍和地区には多くあるので、各所に早期の遺物出土土地があるものと思われる。

### 2. 繩文時代中期の小集落

繩文時代中期後葉の住居址5軒と、多くの土壙・方形配列土壙群が台地の縁を取り巻くように構築され、それぞれの住居址もある距離を保ちながら立地し、台地上方に大形な方形配列土壙群を備えていることから、ひとつの集落と考えたが、住居址の形態・石囲い炉の構築方法・出土土器の年代比定等をみると、中期後葉ではあるけれども年代差があると思われる。

器形の分る土器が少ないので土器形式を分類することがやや困難ではあるが、1号住居址と3号住居址の壘形土器は類似点が多い。住居の大きさに違いはあるが、石囲い炉の形態・石を平状に据える形式にも類似点があり、不規則な柱穴の配列等から1号住居址と3号住居址は同時期と思われる。この2軒に類似するものは2号住居址であるが、土器形式から推量すると1・3号住居址よりもやや古い要素がある。むしろ、5号住居址出土の古い形式の土器に類似するように思われる。5号住居址が2時期にわたるものかどうか不詳のことが多いが、竪穴の不整形・柱穴の重複状態・炉が2か所にあることから、新旧の住居の重複を想定するのが妥当かと思われる。そうなると、5号住居址の古い時期と3号住居址が同時期かと思われる。

最も新しい形態・土器形式の住居址は4号住居址で、同様に新しい形式の土器が5号住居址から出土しているので、仮に新しい住居址を6号住居址とすれば4・6号住居址のグループが想定され、繩文時代中期後葉の中で、1・3号住居址、2・5号住居址、4・6号住居址の小集落が想定できる。

### 3. 方形配列土壙群

本文の報告でも触れたように、A地区で大形な土壙が6・8による方形配列が想定される。とくに主体となる土壙1・5・2・8・3・10の形態。出土遺物は類似点が多いことから集合体の土壙群と思われる。このような形態の土壙群は、以前に諏訪群原村阿久遺跡で縄文時代前期の方形配列土壙群が何基か検出された。このなかで柱痕が確認されて、方形柱列の遺構名が使われている。その後、飯田・下伊那地方でも検出されている。今回の場合は柱痕の有無は確認されていないが、どの土壙も二次的に幅広くて深い穴が掘り込まれ、焼土や炭が多く検出されている。焼土のあり方をみると、上層・中層・下層にそれぞれ重なるように検出され、その間に土器片が集中したり、配石が置かれているものもある。最も顕著なものは土壙8である。上層から中層にかけて焼土と炭が重なり合い、その中から一個体を含む壺形土器・土器片が重なり合うように発見されている。これらの土器は壙内で焼かれたものと思われるほど二次的に焼けている。この状態をみるとかぎり柱穴とは思いがたく、埋葬に伴う焼土や炭塊か、呪詛的な火の使用と供獻的な土器の存在のように思われる。そのために方形柱列とは呼ばないで、「方形配列土壙群」の呼び方を用いた。

出土した土器は、全て縄文時代中期後葉に比定され、カヤハラ遺跡出土の中期の土器としては最も新しい形式で、4・6号住居址と同じ時期のものと思われる。この時期の住居址はここでは2軒に留まっていることから、このような規模の大きな土壙群を構築する労力が備えられていたかどうか疑問が残る。ともあれ、山間地の小台地にこのような遺構が存在したことは事実であって、今後に課せられた大きな課題のひとつである。

### 4. 伍和地籍の分布調査

本文でも触れているように、伍和地区では初めての本格的な発掘調査であったが、予想以上の成果が上がっている。伍和地区には以前から濃厚遺跡の存在が伝えられており、阿智第二小学校には相当量の土器・石器が保管されている。しかしながら、埋蔵文化財包蔵地一覧をみるとかぎり詳細分布調査が遅れている地域の一つであることが分る。この一覧表で縄文時代の遺物出土状況をみると、中期と後期だけに留まっていて、旧石器・早期・前期・晚期の出土が全く記録されていない。今回の調査が行われる前は、カヤハラ遺跡では縄文時代中期だけが登録されていた。発掘調査の結果、縄文時代中期はもちろん早期・前期・後期の遺物が出土し、早期の遺構さえ確認され、平安時代の灰釉陶器片も発見されている。これを一覧表に記入してみると、○の数は5つになる。調査の進んだところはこのくらいが普通の状態で、この地域の組織的な分布調査が必要なことを物語っている。今回の発掘調査を契機にして伍和地区の詳細調査が計画される好いと思われる。



写図1 カヤハラ遺跡からの遠望



写図2 調査前のカヤハラ遺跡と遺構全景





1. 東から

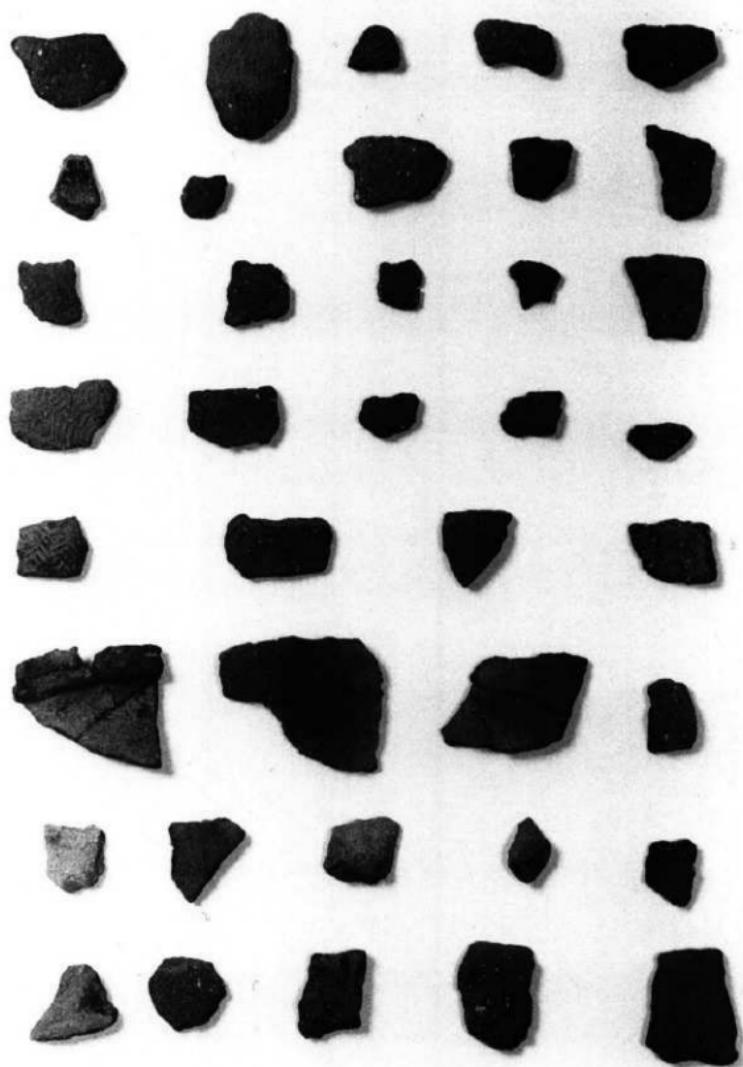


2. 西北から

写図4  
C地区の遺構群（土塙群・集石群・2号住居址）

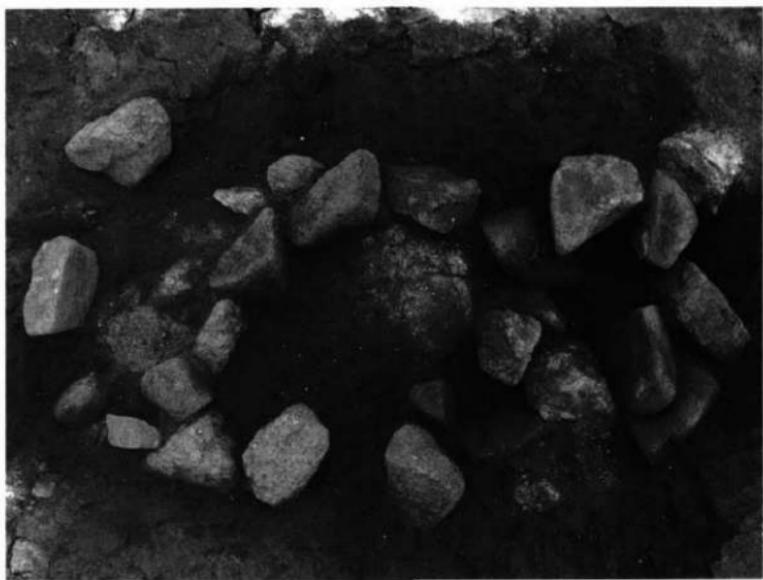


写図5  
縄文時代早・前期の土器



写図 5  
集石炉 1





1. 下層の集石



2. 上層の集石



1. 上層



2. 下層



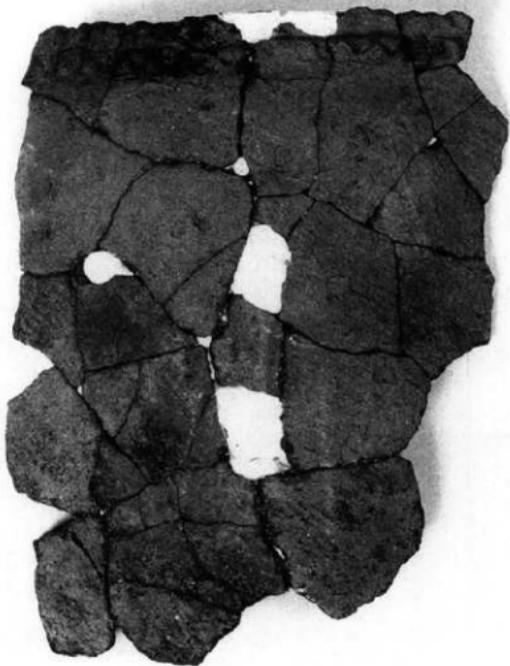
1. 集石炉 4



2. 集石炉 5

写図  
10

土壤  
21  
出土  
土器





1. 住居址全景



2. 石囲い炉

写図12

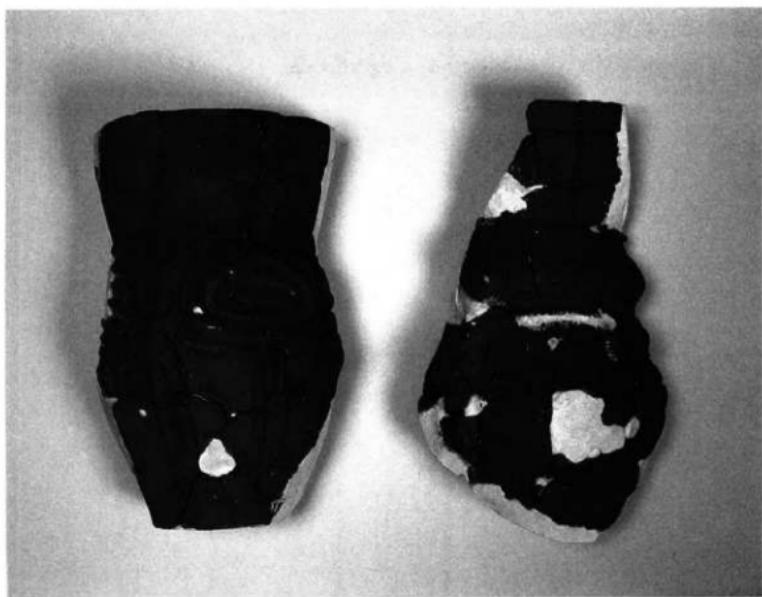
2号住居址



1. 全 景



2. 石囲い炉



左 1号住居址

右 3号住居址



1号住居址



2号住居址

写図  
14

3号住居址



1. 全 景



2. 石 囲い炉



3号住居址

1. 出土土器



2. 土器取り上げの跡

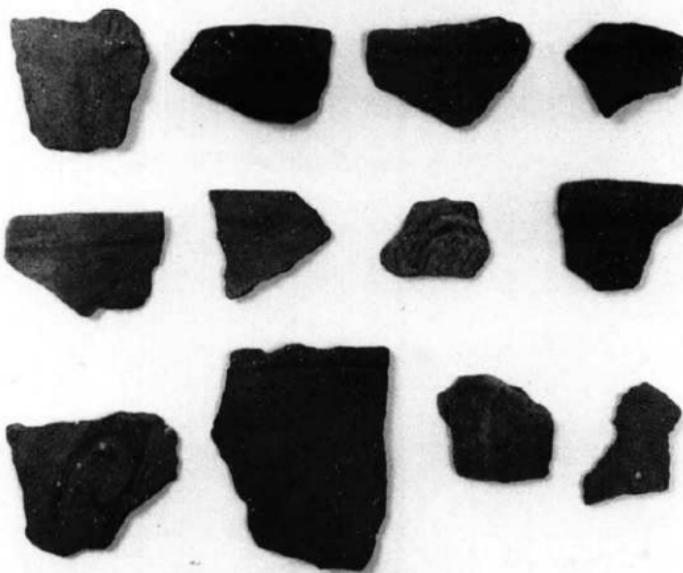


1. 全 景



2. 石 囲い 炉

4号住居址



方形柱列

写図 18

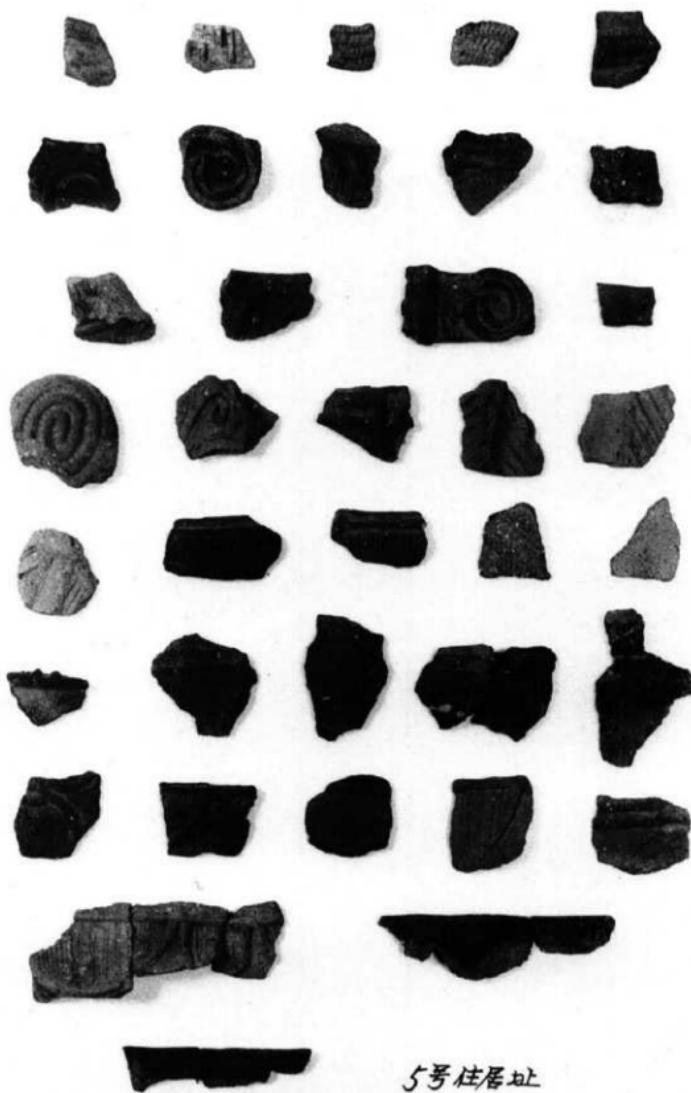
5号住居址



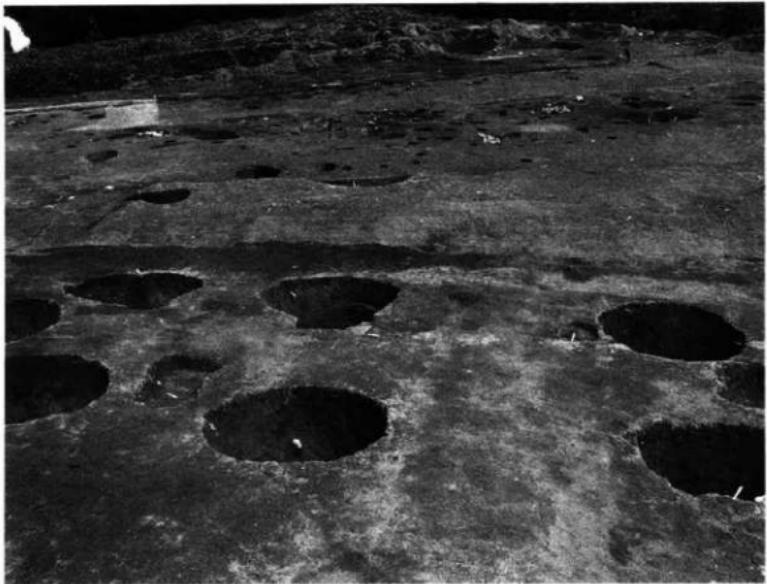
1. 南から



2. 東から



写図20 方形配列土壙群の位置



1. 西上方から



2. 1号住居址の北

写図21 方形配列土壙群



1. 北から



2. 東から



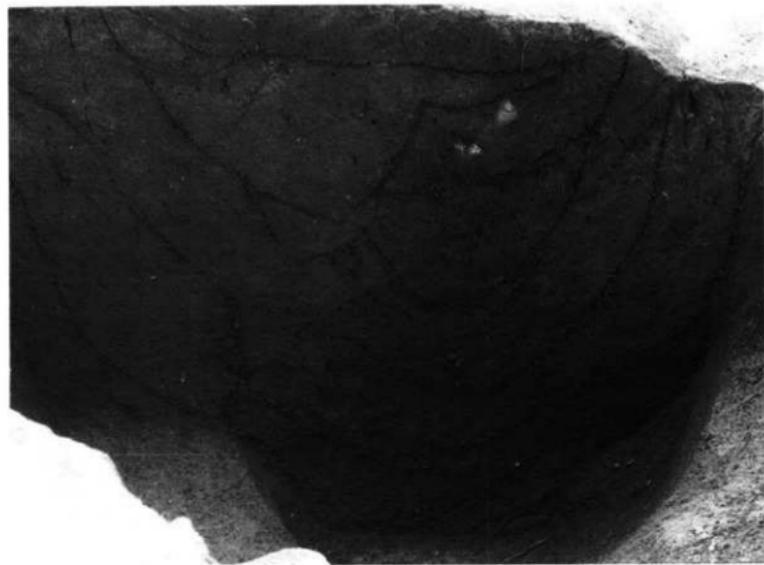
1. 土 壤 3



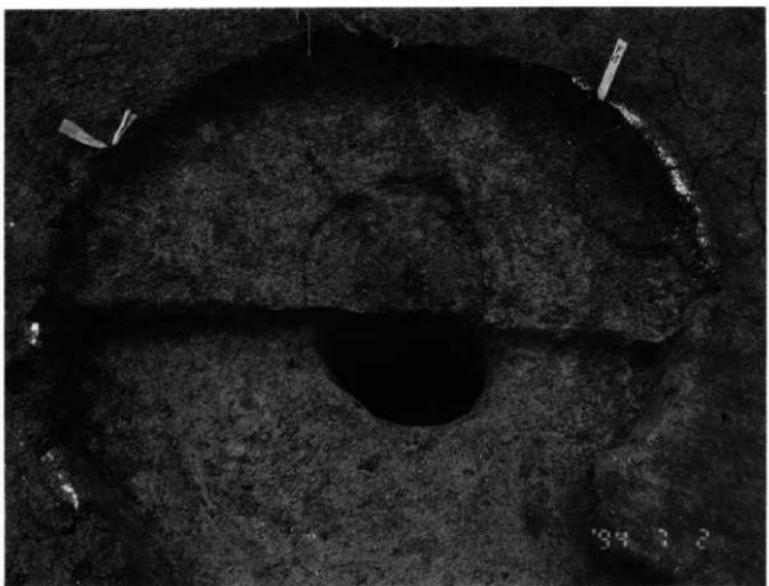
2. 土 壃 8 の土器・焼土の状況



1. 土 壤 5



2. 土 壤 10



1. 土 壤 15



2. 土 壤 45 の 土 層 断 面



1. 上面の配石



2. 掘り込んだところ

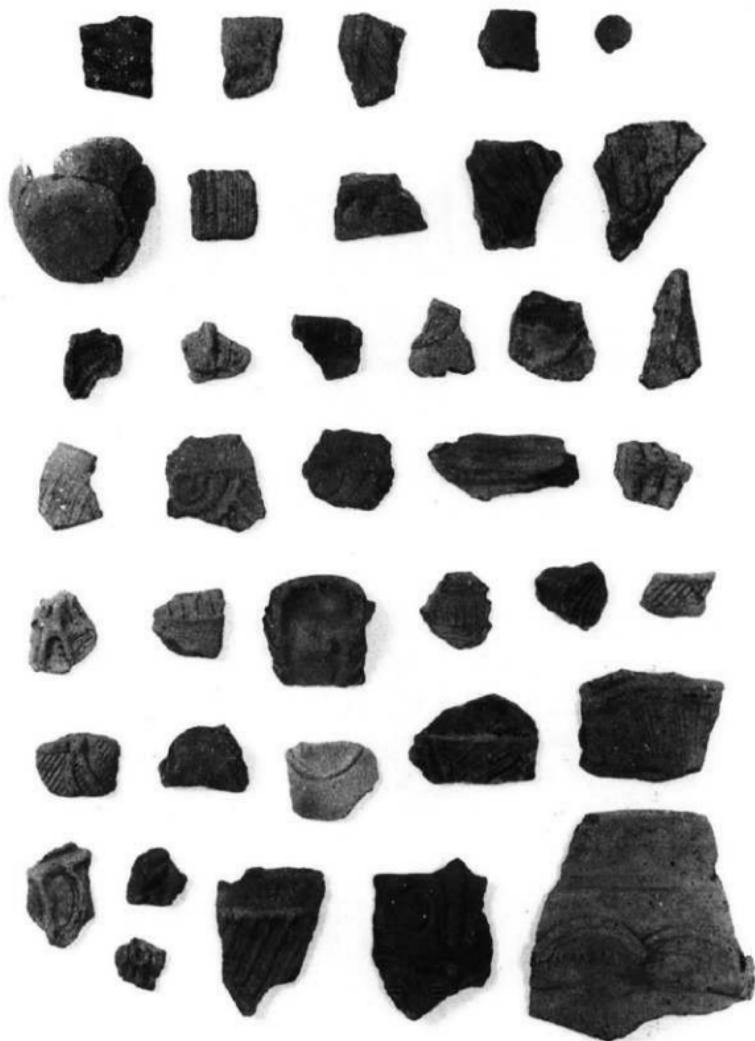


1. 土壌63（縄文早期土器出土）



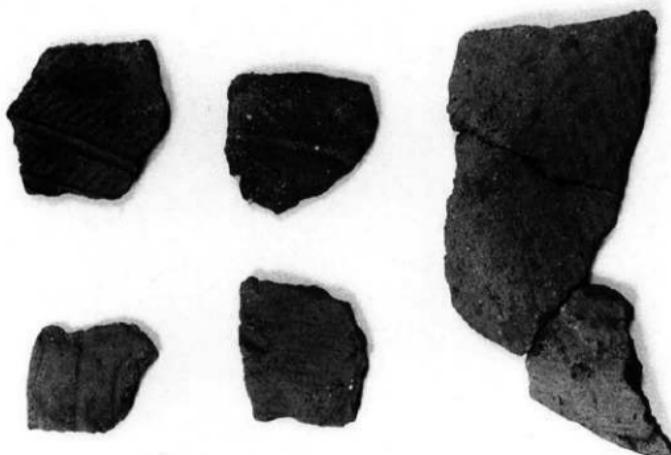
2. 土壌65（炭の出土が多い）

写図 27 土壌・グリット出土土器





1. 土壌 8 出土壺形土器



2. 土壌78出土縄文時代後期土器

写図29  
硬砂岩・硅岩系の石器

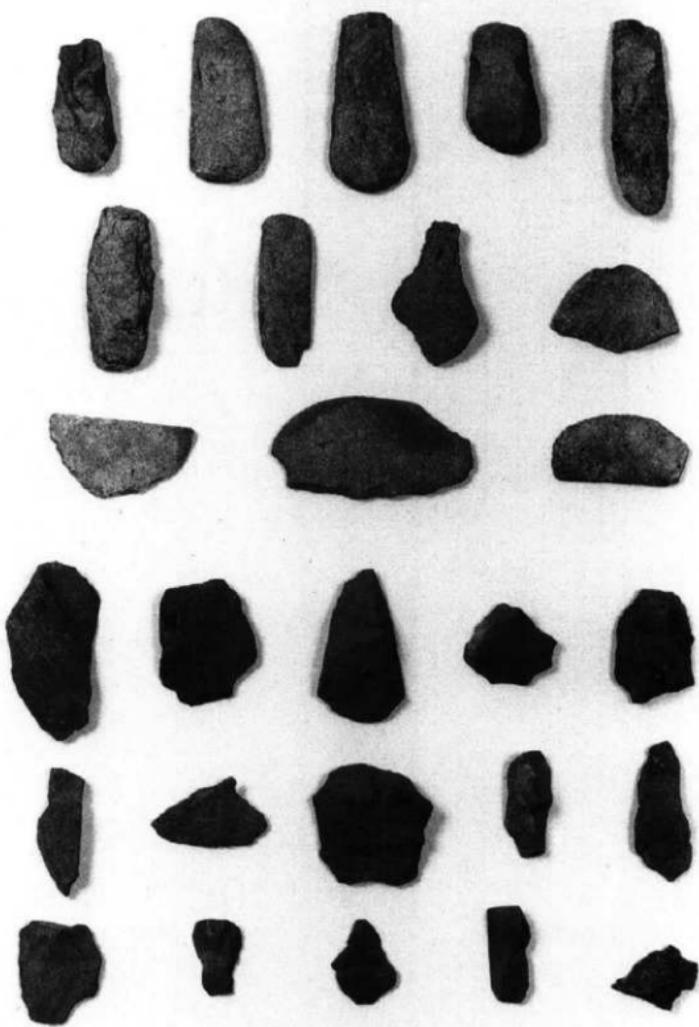
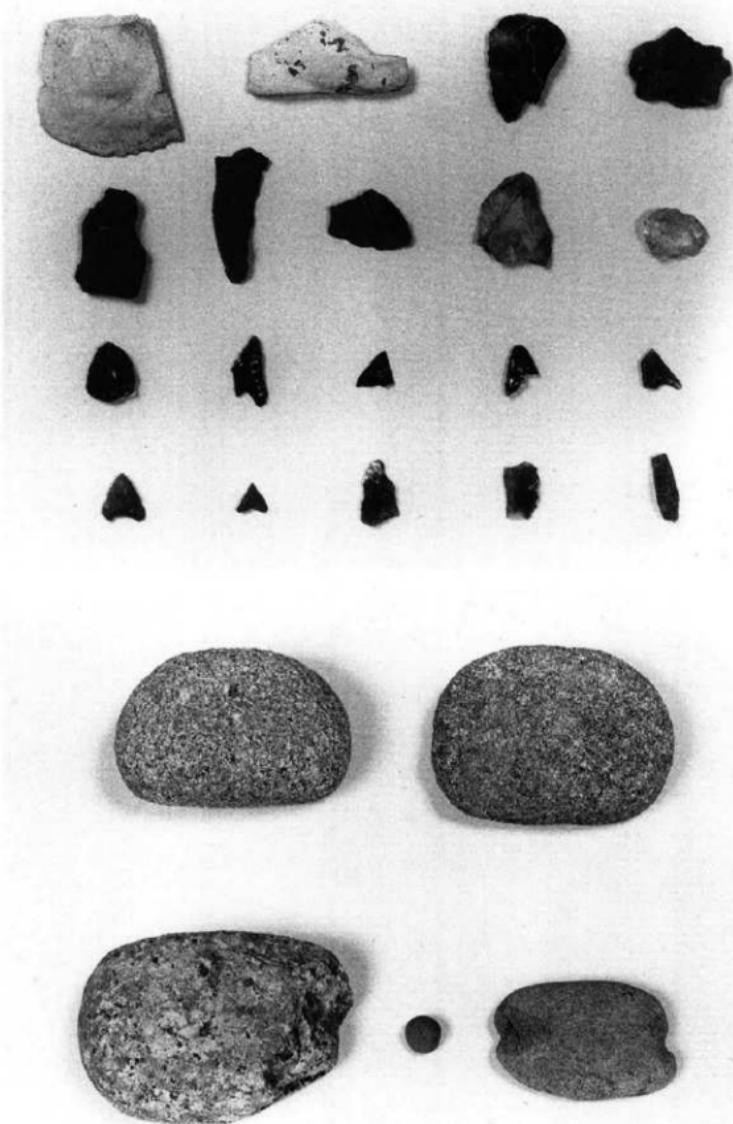


図30 石器の系縄断面形状



写図31 小形石器と丸石



写図32  
調査風景



阿智村伍和大鹿地籍県営土地改良総合整備事業に伴う  
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

## カヤハラ遺跡

平成7年3月27日 印刷

平成7年3月31日 発行

編集・発行 阿智村教育委員会  
長野県下伊那郡阿智村

印刷 株式会社新葉社

